

# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.153

2006年2月

名古屋大学東京フォーラム2006を開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

## 目次

●ニュース	
名古屋大学東京フォーラム2006を開催	2
大学入試センター試験が実施される	4
山本理事がウォリック大学を訪問	4
学生生活に関する教職員研究会を実施	5
新規採用職員フォローアップ研修を実施	5
年末キャンパススクリーンを実施	5
●知の先端	
高クヌッセン数流れの総合的解明—原子・分子の流れをとらえる—	6
新美 智秀 (大学院工学研究科教授/高等研究院教授)	
1ミリの動物の研究から行動の巧妙なからくりを探る	8
森 郁恵 (大学院理学研究科教授/高等研究院教授)	
●教育のデザインとプラクティス	
チーム参加型プログラムによる教育の体系化	10
吉田 俊和 (大学院教育発達科学研究科教授)	
寛容さの涵養(「わからない」からの出発)	12
秋庭 史典 (大学院情報科学研究科助教授)	
●同窓生から	
税関の仕事について	14
秋山 昌子 (名古屋税関業務部分析部門)	
信田 繁一 (名古屋税関業務部検査第2部門)	
吉満 匡平 (名古屋税関西部出張所通関第2部門)	
●職員から	
技術の文化・ガラス工作	16
野田 敏昭 (全学技術センター教育・研究技術支援室長)	
●学生の元気	
就活サプリと就活サプリ塾に関わって	17
吉村久美子 (理学部地球惑星科学科4年)	
体育会会長表彰・個人の部	
アーチェリーをはじめ	18
葛山 あい [アーチェリー部]	
部活で得たもの	18
社本 学 [舞踏研究会]	
ライフル射撃部に入って	18
水野 祐輔 [ライフル射撃部]	
全日本選手権～漕魂伝授 from 北川先輩～	19
中村 良 [漕艇部]	
ボートと小さな感動	19
北川 哲 [漕艇部]	
ボクシングを通じて学んだこと	19
伊地知 大 [ボクシング部]	
体育会会長表彰・団体の部	
勝利に向かって—大学における部活動—	20
弓道部 [後藤 美保]	
名古屋大学体育会会長表彰を受けて	20
ライフル射撃部 [小木首拓也]	
部活動を通して何を学んだか	20
漕艇部 [堤 貴彦]	
4年間の部活動を振り返って	21
相撲部 [大崎 貴弘]	
名古屋大学体育会ボクシング部主将として	21
ボクシング部 [岡本 和之]	
●地域にひらく	
「名古屋大学附属図書館友の会」の活動	22
名古屋大学附属図書館友の会事務局	
●部局ニュース	
第4回坂田・早川記念レクチャーを開催	23
人間・社会環境学の構築ワークショップを開催	23
シアクラ大学と合同セミナーを開催	24
地球水循環研究センターが公開講演会を開催	24
公開セミナー「先端技術が拓く未来のバイオ研究」を開催	25
アジア農科系大学連合(AAACU)とワークショップを開催	25
今年度の農業教育公園・講演会が終了	26
ICCAE2005年度第6回オープンセミナーを開催	26
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年12月16日～平成18年1月15日	27
●イベントカレンダー	30
●INFORMATION	
名大史をつむぐ資料を大学文書資料室に!	31
●ちょっと名大史	
名古屋大学「職員用バッジ」	32

# 名古屋大学東京フォーラム二〇〇六を開催 —バイオ、ライフサイエンスが拓く未来—





	2	
3	4	5

1

- 1 開会のあいさつをする平野総長
- 2 技術シーズ展示会
- 3 あいさつする徳永審議官
- 4 講演する郷お茶の水女子大学長
- 5 講演する丹羽全学同窓会副会長・関東支部長



名古屋大学東京フォーラム2006が、1月24日（火）、東京都千代田区の学士会館において、名古屋大学全学同窓会の共催を得て開催されました。

このフォーラムは、我が国の学術研究の課題を広い視点から捉えるとともに、産学連携の新たな契機とするために開催されているもので、3回目となる今回は、「バイオ、ライフサイエンスが拓く未来」をテーマに行われ、関東地方在住の同窓生や企業関係者を中心に約300名の参加がありました。

講演会では、平野総長による開会あいさつ、文部科学省の徳永 保審議官（高等教育担当）の来賓あいさつに続き、バイオ・ライフサイエンス分野の第一人者で、本学名誉教授の郷 通子お茶の水女子大学長が、「生命情報とネットワークの世界－産学連携に向けて－」と題して、また、全学同窓会

副会長・関東支部長の丹羽宇一郎伊藤忠商事株式会社取締役会長が、「ライフサイエンスとビジネスイノベーション」と題して講演し、会場を埋め尽くした参加者は熱心に耳を傾けていました。

続いて行われた産学連携交流会（全学同窓会関東支部懇親会）では、平野総長及び丹羽全学同窓会副会長・関東支部長のあいさつの後、全学同窓会関西支部長の寛 哲男三洋化成工業株式会社取締役会長の発声で乾杯し、なごやかな雰囲気の中で、旧友との再会のひとときを楽しむ同窓生や、産学連携等について情報交換を行う企業関係者の姿が会場のあちらこちらで見られました。

また、技術シーズ展示会では、大学院生命農学研究科、大学院医学系研究科、大学院工学研究科、大学院情報科

学研究科、大学院理学研究科等で行われているバイオ・ライフサイエンス分野の最先端研究や技術シーズ、産学官連携推進本部、名古屋大学協力会、中部 TLO 及び全学同窓会を紹介した計28の展示ブースが設けられ、各ブースの担当者が来場者に熱心に説明していました。

なお、同日、全学同窓会関東支部総会が、140名出席の下、開催され、丹羽全学同窓会副会長・関東支部長のあいさつの後、片岡大造全学同窓会関東支部事務局長による活動報告・活動計画等が行われました。

## 大学入試センター試験が実施される

－ 本学関係会場で6,200余名が受験 －

平成18年度大学入試センター試験が、1月21日（土）、22日（日）の2日間、全国721会場で実施され、本学関係では、東山キャンパスや学外の高等学校など8会場で、6,200余名が受験しました。

今年度のセンター試験では、利用大学が前年度より31校増え、過去最高となったものの、志願者は、前年度より



試験に臨む受験生

18,568名減の551,382名で、3年連続の減少となりました。

試験当日は、心配された雪も降らず、寒空の下、午前7時すぎから、コートやマフラーで身を包んだ受験生が、会場に集まり始め、参考書やノートで最終チェックしたり、友人との会話でリラックスするなどして、各々の方法で試験に備えていました。また、豊田講堂やグリーンベルトでは、高校ごとに集合し、教師から激励を受けたり、円陣を組んで健闘を誓う受験生の姿が見られました。

本学関係の試験場では、1日目の公民、地理歴史、国語、外国語、2日目の数学、理科と予定どおり行われました。また、平野総長と豊田理事・事務局長が、本学関係の各試験場を訪れ、試験場主任、教職員にねぎらいの言葉をかけました。

なお、本学の個別学力検査は、分離・分割方式により、前期日程が2月25日（土）、後期日程が3月13日（月）に実施されます。

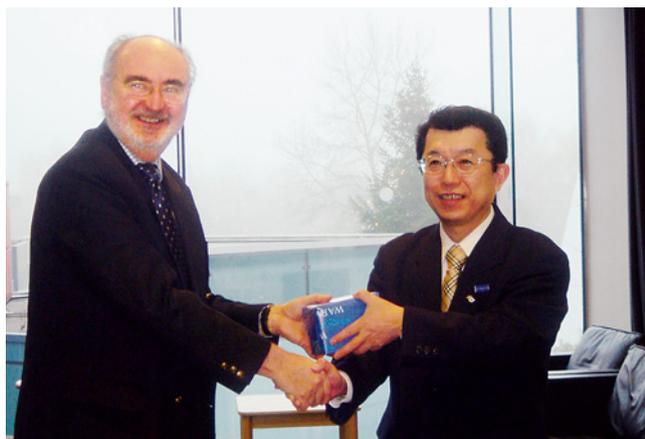
## 山本理事がウォリック大学を訪問

山本理事は、12月8日（木）、9日（金）、早川 AC21推進室長らとともに、AC21国際フォーラム2006（7月3日～7日にウォリック大学で開催予定）等に関する打合せのため、イギリスのウォリック大学を訪問しました。

8日に行われたポール・グレートリックス教務部長との会談及びダレン・ウォリス教務部事務局次長、ジュリアン・

モス教務部行政官との会談では、ウォリック大学のベンチマーキング活動についての調査及び意見交換を行うとともに、次回フォーラムで行われる AC21ベンチマーキング・ワークショップの内容等について議論しました。

また、9日には、ステュアート・パーマー副学長を表敬訪問した後、次回フォーラムの会場となる学内施設の視察、同フォーラムの準備を担う企画運営グループとの会談が行われました。会談には、同グループから、フォーラムの総責任者であるロバート・リンドレー副学長（国際交流及び機会均等問題担当）をはじめ、7名が出席し、フォーラムの構成、計画の進行状況、広報等について有意義な意見交換が行われました。



握手をするステュアート・パーマー副学長（左）と山本理事（右）

## 学生生活に関する教職員研究会を実施



研究会の様子

平成17年度学生生活に関する教職員研究会が、12月6日(火)、シンポジオンホールにおいて実施されました。

この研究会は、本学における学生指導の諸課題を検討するとともに、学生指導のあり方について研究討論及び意見交換を行うことにより、教員及び事務職員の連携をより緊密なものとし、学生指導の円滑な運営を図ることを目的として実施されているもので、今年度は、「就職を取り巻く現状」を研究課題とし、平野総長をはじめ、教職員約70名が参加しました。

研究会では、芳賀洋二株式会社ベネッセコーポレーション本社総務部長による「人事制度の変化と採用について」と題する基調講演が行われ、参加者は、人事制度の概論と現状について熱心に聞き入っていました。続いて、「名古屋大学における就職支援」をテーマに行われた研究討論では、本学の就職の実態等について活発な意見交換が行われるなど、参加者にとって有意義な会となりました。

## 新規採用職員フォローアップ研修を実施

平成17年度第2回新規採用職員フォローアップ研修が、12月19日(月)、豊田講堂第一会議室において実施されました。

この研修は、本学に新規採用後3～6か月までの職員を対象に、法人職員として必要な業務遂行上の基礎知識の再確認、能力の開発及び養成を図ることを目的として、今年度から本学独自で実施されているもので、今回は18名が参加しました。

研修では、午前中に、社会人としての心構えや、電話応対、名刺交換等のビジネスマナーについて実演を通して学び、午後からの金井篤子教育発達科学研究科教授による講義「職場の人間関係」では、自己診断テストを行いながら

自分自身の対人関係について知るとともに、より良い対人関係の築き方について学びました。また、2グループに別れての班別自由討議では、本学で働き始めてから現在まで疑問に思っていること、今後の目標など、先輩職員を進行役に活発な意見交換が行われ、参加者にとって実りのある研修となりました。



班別自由討議の様子

## 年末キャンパスクリーンを実施



各々の清掃場所に向かう本部職員(本部2号館玄関前)

年末キャンパスクリーン(屋外清掃)が、12月に全学の教職員及び学生の参加を得て実施されました。

キャンパスクリーンは、構内美化運動の一環として、名大祭終了後と年末の年2回実施されているもので、年末キャンパスクリーンは、今回で17回目となります。

本部では、12月26日(月)の午後、多くの職員が、寒い中、防寒着を身にまとい、東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれて、清掃、枯れ葉、空き缶、紙くず等の除去、不要な立看板、ビラ等の撤去などを行い、約130袋分の落ち葉、空き缶等を回収しました。

本学では、今後も、キャンパスクリーンを実施することにより、「ゴミのないきれいなキャンパス」を目指すことにしています。

# 高クヌッセン数流れの総合的説明

## —原子・分子の流れをとらえる—

新美 智秀 大学院工学研究科教授／高等研究院教授

熱流体現象を原子・分子レベルで扱うことが必要かどうかは、気体流の希薄度を表わす重要な無次元パラメータであるクヌッセン数 ( $Kn$ : Knudsen number) を用いて判断できます。クヌッセン数は、平均自由行程  $\lambda$  (図1参照: 気体分子が他の分子と衝突しないで飛行する行程の平均) と流れ場の代表長さ  $L$  (たとえば管路内の流れであれば管の直径) を用いて  $Kn = \lambda/L$  で定義され、一般に  $Kn$  数が0.01を超えると、気体流は連続体として近似できず、原子・分子の流れとして扱わなくてはなりません。このような流れを私達は「高クヌッセン数流れ」と命名しました。大気圧下では空気の気体分子(酸素や窒素)の平均自由行程は約60nmですから、従来はクヌッセン数の大きい流れと言え、真空中や宇宙空間などにおける低密度な気体の流れ、いわゆる希薄気体流を指していました。ところが、ナノ・マイクロデバイスがいたるところで製作されるようになり、代表長さ  $L$  の小さい流れ場が出現しました。たとえばハードディスク記憶装置ではディスクと読み出しヘッドの隙間は数十 nm です。したがってこの隙間の気体の流れは、クヌッセン数が1のオーダーとなって「高クヌッセン数流れ」の仲間

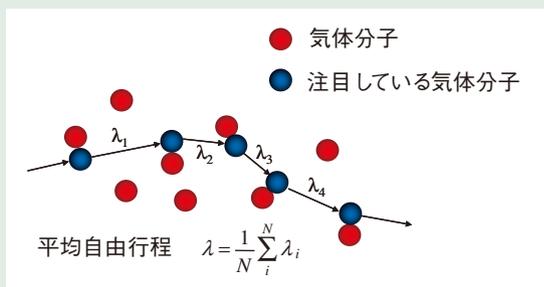


図1 平均自由行程

となり、原子・分子レベルでの解析が必要となります。

それでは、このような「高クヌッセン数流れ」では何が起り、何が重要になり、何を明らかにする必要がありますでしょうか。図2に示したように、平均自由行程が大きい場合には、分子同士の衝突頻度が極端に減少しますので、非平衡現象が起こります。また代表長さが小さい場合には、気体分子が他の気体分子と衝突する頻度に対して固体表面と衝突する頻度を無視できなくなり、流れ場は気体分子と固体表面との相互作用に強く影響されることとなります。いわゆるナノテクノロジーにおいては、デバイスの構築・形成に重点が置かれていますが、これらは作動時には常に雰囲気ガスと接触しているために、気体分子とデバイスとの相互作用が非常に重要であるにもかかわらず、そこには力点が置かれていないのが現状です。高クヌッセン数流れを理解するのに必要な基礎的な実験データの取得は、原子・分子を直接扱うモンテカルロ直接法 (DSMC法) や分子動力学法 (MD法) などのシミュレーションによる高クヌッセン数流れの詳細な予測の可能性にも結びつきますので、非常に重要です。

私達の研究グループでは、ナノ・マイクロデバイス開発に関連した高クヌッセン数の流れをミクロスケールで解析するための光学的解析の手法として、気体流には共鳴多光子イオン化法 (REMPI法)、固体表面の計測には感圧・感温色素 (PSP/TSP) の1分子膜 (Langmuir-Blodgett: LB膜) を開発してきました。高クヌッセン数流れ (超希薄気体流) で発現する強い非平衡現象の解明にはREMPI法を用い、気体分子と固体表面の干渉問題 (面・分子干渉問題) に関しては分子線装置を

開発するとともに、REMPI法を利用した飛行時間法による反射分子の速度分布の計測から固体表面との内部エネルギーを含めたエネルギー交換、運動量交換、反射分子の流束強度分布の反射角度依存性、吸着確率と吸着・脱離現象、適応係数、反射分子の内部エネルギーの非平衡性などの精緻な実験データを取得しています。また圧力タップや熱電対などの計測手法が適用できないナノ・マイクロデバイスまわりの流体力学的・熱力学的特性の解明には、気体分子と固体表面との相互作用に基づく計測法であるPSP/TSPを用いて、デバイスに作用する応力や熱流束、原子・分子レベルでの伝熱、マイクロ・チャンネル内の滑り流などの精緻な実験データを取得する計画です。

今年度に高クヌッセン数流れに関連した実験を中心とした研究者に分子シミュレーションを中心とした研究者および分子センサー開発を中心とした化学者が協同する全国的な研究組織を立ち上げ、高クヌッセン数流れの総合的解明に向けた準備を開始しました。高等研究院の萌芽的研究として平成15年度に「高クヌッセン数流れのミクروسケール・アナリシス」の研究プロジェクトを採択いただきましたが、「高クヌッセン数流れ」を国内外へ発信して、その周知・定着を図るとともに、プロジェクトの最終年度に全国的な研究者の組織化を実現でき、当初の目的は達成できたと自負しています。

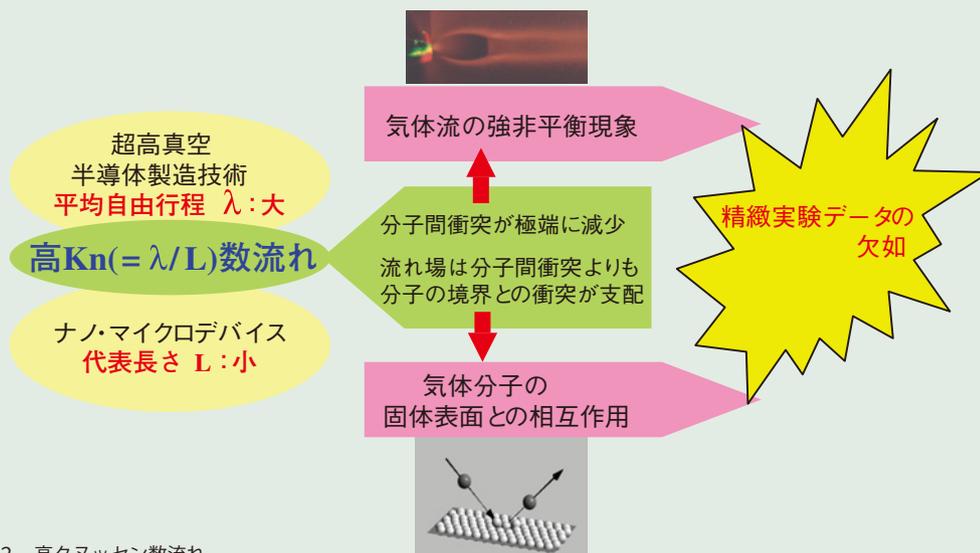


図2 高クヌッセン数流れ

1977年名古屋大学工学部機械学科卒業、1979年名古屋大学大学院工学研究科修士課程修了、同年トヨタ自動車(株)入社、1983年名古屋大学工学部助手、1989年工学博士、同年名古屋大学工学部講師、1990年同助教授（1996年ドイツ航空宇宙研究所）、2002年同教授。2003年10月より名古屋大学高等研究院教授を併任し、研究プロジェクト「高クヌッセン数流れのミクروسケール・アナリシス」を推進。

にいみ ともひで



# 1ミリの動物の研究から行動の巧妙なからくりを探る

森 郁恵 大学院理学研究科教授／高等研究院教授

動物は、まわりの環境を的確に察知し、上手に応答することができます。このしくみによって、動物は自らの生存を確保し、「種」と呼ばれる自分の仲間が地球上から消えてしまわないように子孫を残すことができるのです。この精巧に出来ている行動のからくりとは、どのようなものでしょうか。わたしたちの研究室では、行動のしくみを解き明かすために、線虫 *C. elegans* (シーエレガンス、*Caenorhabditis elegans*) と呼ばれる体長が約1ミリしかなく、普段は土の中で細菌を食べて生活しているとても小さな動物を使って研究をしています(図1)。普段は、自分自身で精子と卵子の両方を作り、自分の体の中で受精して子孫を作る「雌雄同体」として生きています。3日半で300個体の子供を産みます。精子だけを作る雄がときどき産まれますが、雄は雌雄同体と交配し、雄の精子は雌雄同体で作る卵子と受精することもできます。

*C. elegans* では、受精卵が、どのように分裂して、どういう組織を作っていくのかという発生の過程が全てわかっています。この細胞系譜と呼ばれる細胞分裂のパターンから、*C. elegans* は、959個の細胞から体が作られていること、そのうち、302個は神経細胞であることがわかりました。神経細胞は別の神経細胞と、シナプス結合と呼ばれるつながり方で連結され、情報を伝達しています。*C. elegans* の神経細胞の全てのつながり方は電子顕微鏡で細かく調べられ、302個全ての神経細胞のつながり方、すなわち、神経回路がわかっています。このような細かいレベルまで調べられている動物は、現在までのところ、*C. elegans* 以外にはありません。また、*C. elegans* の遺伝情報が書き込まれているゲノムを調べてみると、少なくとも約60%の遺伝子は、ヒトの遺伝子と同じであることもわかりました。このように、線虫 *C. elegans* は遺伝学や分子生物学という学問分野

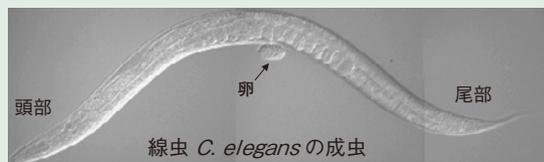


図1 線虫 *C. elegans*

で使われる実験手法が全て適用できる動物です。これらの利点を土台として、動物の発生や神経の研究が世界中で盛んに行われています。もちろん、わたしたちの研究室も例外ではありません。この状況は、1960年代に、*C. elegans* を実験動物としてたった1人で研究を開始した Sydney Brenner 博士の意図どおりで、Brenner 博士の先見の明に、ただただ感嘆の声をあげるしかありません(図2)。筆者のアメリカの大学院時代の指導教官である Robert Waterston 博士は、Brenner 博士の最初の弟子たちの1人です。筆者は孫弟子、筆者の学生たちは、ひ孫弟子ということになりましょうか。

*C. elegans* を、餌である大腸菌を与えて飼育した後に温度勾配上に置き、その後の1時間の動きの軌跡をみてみると、餌を食べていた時の飼育温



図2 2001年9月にお茶の水女子大学で開催された日本遺伝学会において、*C. elegans* 研究の創始者である Sydney Brenner 博士(中央)を囲んで筆者の研究室の学生たちと記念撮影。Brenner 博士の左隣は、岡山大学教授・香川弘昭先生、右隣は筆者。Brenner 博士は、線虫研究の功績により、2002年ノーベル医学生理学賞を受賞された。

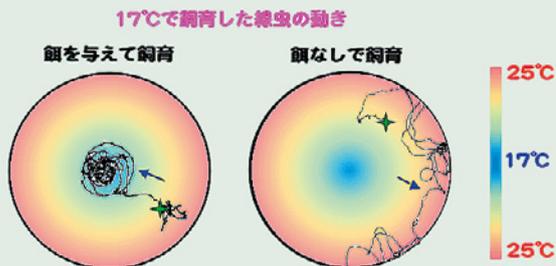


図3 温度走性行動。線虫 *C. elegans* は、飼育する温度と飼育時の餌の有無を関連づけて記憶することができる。この図では、17°Cで飼育された線虫を同心円状の温度勾配上に置いて（緑星印）、1時間の移動した軌跡をしめす。左図では、17°Cで餌を与えて飼育された線虫が、同心円状の温度勾配上に置かれると（緑星印に置いた）、17°Cへ移動したことをしめす（青矢印）。右図では、17°Cで餌を与えられずに飼育された線虫が、温度勾配上で、17°Cを避けて移動したことをしめす（青矢印）。

#### 温度走性の神経回路

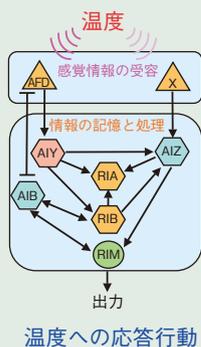


図4 温度走性の神経回路。レーザー殺傷実験により同定された温度走性にかかわる神経回路。この回路では、まず、温度の受容が行われ（感覚情報の受容）、温度や餌条件の記憶や2角情報の関連付けが行われ（情報の記憶と処理）、その結果として、温度への応答行動として出力される。矢印や線は、ニューロンとニューロンの連絡をつかさどる接続（I. Mori and Y. Ohshima, *Nature* 376, 344-348, 1995より）。

度へ向かって移動するのがわかります（図3左）。逆に、餌を与えないで飼育した後に、温度勾配上での動きをみると、飢餓を体験していた温度を避けるように移動しています（図3右）。温度走性と呼ばれるこの行動の興味深いところは、飼育する温度と、飼育時に餌を与えるか与えないかによって、飼育温度の嗜好性が変化していることが、温度勾配上での軌跡を見ることによって、すぐにわかる点です。すなわち、生まれつき、好きな温度や嫌いな温度がある訳ではなく、飼育条件を変えることによって行動が変化するので。このような行動の変化は、ヒトの脳で行われる記憶や学習の根幹をなすと言われている神経細胞と神経細胞のつながり（シナプス）で起こる情報の伝達効率やつながりの形の変化（可塑性と呼ばれます）を反映している可能性があります。考えてみると、記憶すること、学習することは、我々ヒトを含めた動物の行動の中に、たくさん潜んでいます。わたしたちは、温度走性をモデル系として研究を進めていくことによって、動物の行動のからくりを遺伝子や神経回路の働き方から知ることによって、記憶と学習のからくりの本質も理解できるのではないかと考えています。

現在までに、温度走性行動に大事な神経回路を決めたり（図4）、数々の遺伝子の働きを明らかにしてきました。今後も、いろいろな切り口から、この行動の研究を進めていって、行動のからくりに迫りたいと思います。

1988年 Washington University 博士課程修了、Ph.D. 1989年九州大学理学部助手、1998年名古屋大学大学院理学研究科（生命理学専攻）助教授、2004年同教授。1996年～1999年科学技術振興機構さきがけ研究21研究員兼任。名古屋大学高等研究院教授。1996年日本遺伝学会奨励賞受賞。  
 モットー：温故知新、論文は科学者の行為の結果であり目的ではない

ひとこと：「女性科学者」から「科学者」への道を探る  
 趣味：「幻のピアノ」を弾いて感性を探る

もり いくえ



# チーム参加型プログラムによる教育の体系化

吉田 俊和 大学院教育発達科学研究科教授

このたび、大学院教育発達科学研究科心理発達科学専攻が取り組むのは、「チーム参加型プログラムによる教育の体系化」というプロジェクトです。このプロジェクトの究極の目的は、若手研究者の養成にあります。そのために、専攻全体の研究体制の活性化を図り、博士学位の取得率を向上させ、修了者の活躍の場を拡げることをめざしています。

心理発達科学専攻の従来の教育課程は、前期課程では、自立的な研究者として必要な基礎的知識や技法を習得させることを目的とし、学生の専攻領域の科目を中心に幅広い科目を履修させ、実験・実習・フィールド型の授業も開講してきました。しかし、修士論文の作成に関しては、学生自身の興味に基づくテーマを個別的に指導するのみでした。後期課程では、研究者育成のため、年度を追って段階的に必要な研究能力や学会誌への投稿を促すための授業科目を開講してきました（心理発達科学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、研究論文指導）。これらは、いずれも教員による個別指導が中心であり、

いわば伝統的な文系型博士学位取得プロセスを踏襲するものであったと言えます。確かに、最近10年間の博士学位授与数は順調に伸びてきていますが、後期課程進学者数も定員の2倍近くに増加しており、学位取得率は30%程度にとどまっています。しかしながら、学位取得者に限れば、その80%以上が大学や短大の研究職に就いています。

以上のような状況を踏まえ、心理発達科学専攻では、従来型の教育課程で学位取得をめざすプロセスに加え、以下のような研究体制を導入し、さらなる学位取得率の向上をめざすことになりました。

## (1) 現在の教育課程の問題点と新たな教育プログラムの提案

現在の教育課程は、個別指導－個別研究活動型が中心です。しかし、そのような教育課程に適合できずに、3年で後期課程修了＝学位取得ができない学生が多く存在しています。その理由は、従来の教育課程と学生のタイプとのミスマッチ（集団活動で力を発揮するような学生）や学生の自立に任せることの限界（明確な指示・マニュアルに慣れた学生の増加による）ではないかと想定しています。そこで教員が主導する共同研究に授業として参加させるチーム参加型の教育プログラム（科目名は心理発達科学課題研究）を導入します。

## (2) チーム参加型プログラムの導入による利点

- ①このプログラムでは、集団活動で力を発揮する学生や明確な指示やマニュアルのあった方がよい学生（学生自身による選択）を対象としています。→ ミスマッチの解消
- ②学生は、基本的には課題研究の授業の中で研究テーマの発見、研究計画、データの収集・分析、論文執筆を行います。日常的に教員やリサーチ・



図1 最近10年間の学位授与数の推移

アシスタントからの支援を受けます。→ 学習支援の仕組み

③学年進行で、支援の受け手から与え手に、実働部隊から企画立案や研究実施の責任者へと役割を変えていきます。それぞれの役割を遂行していく中で、学位取得に必要な研究能力を修得します。→ 周縁的参加から中心的参加へ

### (3) チーム参加型プログラムの特色

このプログラムで育成される能力は、心理学についての高度に専門的な知識や技法に加えて、コミュニケーション／ネゴシエーション・スキル、パースペクティブの広さや多様な考え方をシナジ

ーする能力です。研究が常に多くの人の討議で進められることと、学年進行で討議のまとめや企画立案の役割を果たすようになるので、その中でアイデアを広い視点で捉えることや複数のアイデアをシナジーすることが必要となると期待されるからです。したがって、就職先も従来のような大学等の研究職だけでなく、心理社会行動科学領域では企画・調査能力が必要とされる自治体や民間企業、精神発達臨床科学領域では高度なカウンセリング技術と研究能力が求められるような臨床専門職での活躍が期待されます。

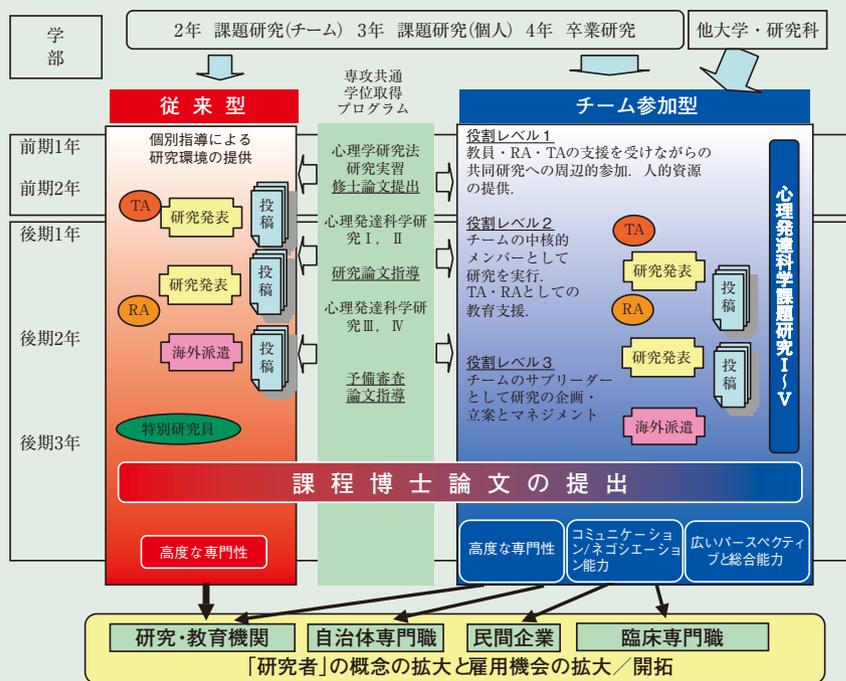


図2 履修プロセスの概念図

1973年3月名古屋大学教育学部教育心理学科卒業  
 1978年3月名古屋大学大学院教育学研究科教育心理学専攻博士課程満期退学 博士(教育心理学)  
 名城大学、三重大学を経て、1994年4月名古屋大学に着任し、現在に至る。  
 専門分野：社会心理学、教育心理学  
 趣味：魚釣り、大学院生との雑談  
 好きな言葉：中庸

よした としかず



# 寛容さの涵養（「わからない」からの出発）

秋庭 史典 大学院情報科学研究科助教授

今回は、私が担当した「芸術と人間」（対象：工学部2回生+文・法・経・教・情・理、登録人数：102名、教室：4C）についてお話しするのに加え、昨年12月に行ったインターメディア・パフォーマンスについても簡単に触れたいと思います。

## ■アンケートの衝撃

「芸術と人間」開講に先立ち、他のいくつかの授業で、芸術や芸術関連の授業についてどう思うか、学生みなさんに尋ねてみました。その回答は、実に痛いところを衝くものでした。以下、代表的な意見を挙げてみます。

・他人の自己表現につきあっているほど暇ではない。

- ・話題が特定宗教・特定地域に偏っていておもしろくない。
- ・ほんものの作品に触れるわけではないから、感動しない。
- ・それほど作品を知らないのにいきなり理論的なことを聞かされてもわからない。
- ・試験で何を評価されるのかよくわからず、不安だ。

それぞれ、なるほどと思わされるものばかりでした。毎日忙しい学生さんにとって、他人の自己表現につきあっている暇などたしかにないでしょう。そこで次のような対応をとりました。



インターメディア・パフォーマンス「cycling」（撮影：村上将城）

## ■対応

- ・芸術作品は基本的に個人の自己表現ではなく、文化の産物であることを理解してもらう。(個性の表現になったのはつい最近のことであるとわかってもらう)
- ・なるべく多くの地域・さまざまな時代の作品に触れてもらう。理論は最小限にとどめ、ひとつでも多く印象に残る作品を見つけてもらう。ポピュラー文化を除外しない。
- ・複製でもなるべく臨場感のある映像を用意するか、ホンモノと複製の区別の少ない媒体を使用する。作品上映は短時間とし、何分で終わるかを必ず予告する。
- ・授業の目標を変更する。「これは偉大な芸術作品だから君たちは理解して当たり前」ではなく、異文化の芸術作品は、「わたしたちの常識とはあまりにかけ離れており、理解しがたいのが当たり前」とすることから始め、目標を、「自分とは違う他人の個性や異文化・過去の文化の理解に向けた寛容さをもつよう努力すること」におく。
- ・評価は、どれだけ異文化あるいは過去の自文化に対する寛容さをもてたか、に絞る。
- ・ほんものの文化に触れる機会を増やすために、毎週取り上げる国や地域は、同時期に開催されていた「愛・地球博」の「ナショナル・デー」にあわせて選び、興味をもった受講生がほんものの文化に近づく機会を残しておく。

## ■レポートと試験

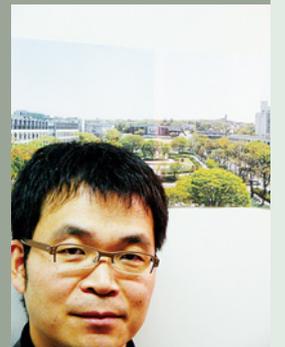
さらに毎授業後、授業で見た地域の作品についての小レポートを提出してもらい、定着度を確かめました。質問には、翌週授業の冒頭で必ず答えるようにしました。15回分終わったところでそれを受講生ごとにまとめて返却し、試験対策用の資料にしてもらいました。試験では、受講生それぞれに、「必ずしも好きにはなれなかったが、それがある文化にとってなぜ重要なのかは理解できた作品」について、説明してもらいました。優れた解答ばかりでした。実際に万博に出かけた方もあり、授業の効果を実感しました。

## ■体験の場を増やす

また、今年度は、情報文化学部平成17年度総長裁量経費プロジェクト「デジタル映像資料を使った新たな文理融合型教育創出のための調査研究」の一環として、4名のアーティスト、パフォーマーと学生の協働作品発表を、アーティストの方々と本学情報科学研究科の茂登山助教授にご尽力いただき実施しました(平成17年12月3日、4日、写真)。伏木啓、井垣理史、高木理恵、山田珠実の皆さんに名古屋学芸大学メディア造形学部と本学情報文化学部の学生が加わり、180名近い方に体験していただくことができました。なお、この作品《cycling》に触発された公開レクチャーが、2月28日(火)午後、IB電子情報館012教室で開かれます。

1966年生。京都大学助手、島根大学助教授、名古屋大学大学院人間情報学研究科助教授を経て、2003年より現職。専門は美学・芸術学。モットーは「忘れないこと」。

あきば ふみのり



## 税関の仕事について

秋山 昌子 名古屋税関業務部分析部門  
 信田 繁一 名古屋税関業務部検査第2部門  
 吉満 匡平 名古屋税関西部出張所通関第2部門

「清水港でコカイン44キロ摘発」、「中部国際空港でMDMA13キロ摘発」というニュースは皆さんも耳にしたことがあるのではないのでしょうか。近年、日本で増加している麻薬や覚せい剤等の不正薬物の密輸入を、日本の水際で阻止しているのが私たち税関職員です。

税関の業務は主に、監視行政、通関行政、税務行政、保税行政の4つに分けられます。

監視行政では、麻薬、覚せい剤やけん銃などの密輸入を防ぐため、海港や空港において商業貨物や海外旅行客の携帯品などの検査等を通じ、違法な輸出入を水際で取り締まっています。通関行政は、国際的な物の流れに係る関所としての役割を果たしています。関税法により貨物を外国へ輸出又は外国から輸入を行う者は、税関に申告し許可を受けること（通関手続）が必要であるため、その申告が正しく行われているか審査しています。税務行政では、輸入品に課せられる税金（関税・消費税等）の徴収等を行い、保税行政においては、税の確保、取締りの観点から、輸入品を通関手続が終わるまで税関の監督下に置くために設けられた一定の地域（保税地域）の許可、監督、搬入貨物の取締りを行っています。

このように、税関の業務は広範囲に及んでおり、それぞれが秩序ある貿易の推進に不可欠な役割を担っています。

現在、私は分析部門に所属しており、主に輸入薬物の鑑定分析をしています。国民の皆様の健康や福祉を守るため、日本に持ち込めない不正薬物を判別し、それらの輸入を阻止しています。

連日、海外から持ち込まれる薬物を分析していると、その種類も年々多様化しており不正薬物とほぼ同様の効果を持つ脱法ドラッグが急増していることがわかります。今後はこれら脱法ドラッグの危険性も改めて見直し、国内への輸入規制を厳しくする必要があると考えております。

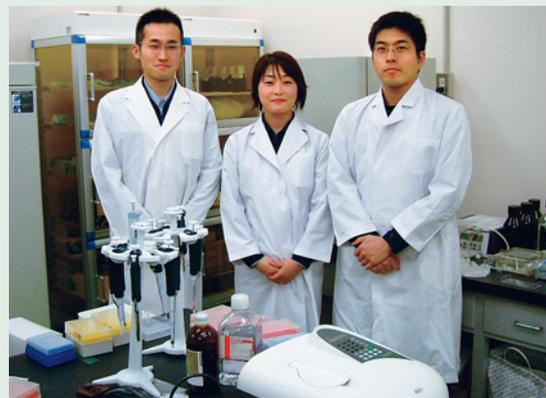
特に東海地区では、昨年は中部国際空港の開港と愛知万博の開催により、海外からの渡航者が増加しました。海外との交流が深まることで日本に良い影響がもたらされる反面、輸入禁制品等が国内へ持ち込まれると、薬物の濫用等で治安が悪化する可能性もあります。

これらの危険から日本の平和と安全を守るため、これからも一税関職員として全力で頑張ります。

(秋山 昌子)



ガスクロマトグラフ・質量分析装置 (GC/MS)



名大出身の分析スタッフとともに 中央が筆者

あきやま まさこ  
 1977年生まれ  
 大分県出身  
 2002年理学部化学科卒業

しのだ しげかず  
 1978年生まれ  
 福井県出身  
 2003年理学部化学科卒業

よしみつ きょうへい  
 1983年生まれ  
 愛知県出身  
 2005年理学部化学科卒業

私は、名古屋税関のコンテナ検査センターで働いています。ここでは、大型 X 線という装置を使い、コンテナの中身の X 線画像を撮影し、その画像を利用して、麻薬・銃といった社会悪物品がコンテナ貨物に隠匿されて密輸されていないかを検査しています。空港での手荷物検査で、X 線を利用して鞆を開けずに検査することがあるのはご存知だと思いますが、それと同じことをコンテナに対して行っていると考えていただけると分かりやすいと思います。X 線画像を利用することにより、複雑・巧妙化する社会悪物品の隠匿手口に対応でき、また、税関検査の時間を大幅に短縮することができます (X 線画像を利用せずにコンテナを開けて検査すると、貨物の種類にもよります

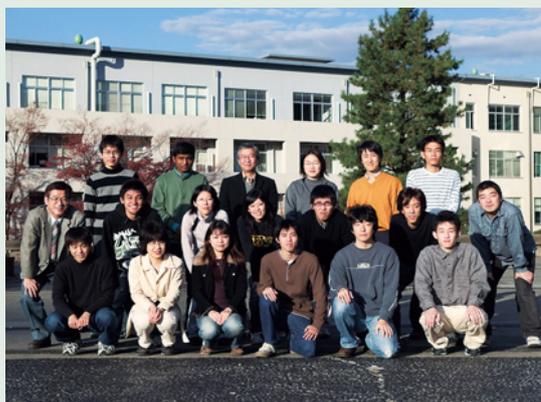
がほしい 2 時間以上かかります)。社会悪物品の密輸の水際での阻止と、多様化・迅速化する物流を妨げないことの 2 点の両立が要求されるこの仕事は、大変ですが非常にやりがいがあります。

(信田 繁一)

現在、私は通関部門に所属しています。皆さんの周りには「Made in China」などと記載された商品はありませんか？このような商品はすべて輸入されたものです。実は私たちの身の回りには輸入された品物がたくさんあり、通関部門ではこのような輸出入貨物についてチェックをしています。具体的には輸出入貨物に関する書類を提出して頂き、その内容・数量・値段などを審査します。さらに必要に応じて貨物そのものを検査して輸出入の許可を行っています。また、輸出品には特別な場合を除いて関税や消費税などの税金がかかります。税金の額は貨物の種類によって異なるので、このチェックも通関部門の仕事のひとつです。

もし銃や麻薬などの密輸入を見逃してしまったら…、あるいはもし税金を不正に免れていたら…。この仕事は貨物の輸出入を管理し、適正な徴税というところに社会的責任があり、使命感とやりがいを感じます。

(吉満 匡平)



2004年度生物無機化学研究室メンバー 前列右から3人目が筆者

野田 敏昭  
 全学技術センター教育・研究技術支援室長

## 技術の文化・ガラス工作

私が採用された時は、理学部化学教室ガラス細工室と呼ばれ、化学科7講座の依頼が主でした。

まずは、ガラス工作の基本であるガラス管を手で回転する練習からはじまり、ある程度出来るようになって初めてガスバーナーの炎の中でガラス管を溶かす作業をさせてもらいました。就職して3年ほど、この溶かしを基本としてガラス管の伸ばし、つなぎ、曲げの猛練習でした。来る日も来る日も同じ作業の繰り返しで、何度も『もうやめようか…』と思いました。そんな時、東北大学金属材料ガラス工作室に3ヶ月間の技術研修に行くことができました。

当時、東北大学には20人ほどのガラス工作技術者が在籍していました。多くの先輩から指導を頂き、また、同じガラス工作技術者を目指す仲間と知り合うことが出来ました。東北での経験から、まだまだ未熟者であるなど痛感し、名古屋に帰ってガラス工作技術者としての道を歩き続けることにしました。

そのうちに研究者や学生の依頼を少しずつ任せられるようになり、研究室との関わりも深まりました。研究の目的を理解し、ガラス装置の果たす重要性を考慮して、装置を製作することが面白くな

り夜遅くまで一緒に実験を行い、装置の改良に取り組んだりしました。そんな中、若手教員と学生が私のために金属とガラスの封入に関する専門書(英語)のセミナーを週1回開催し、和訳してくれたのは、今でも大変役に立っています。

研究者と時を過ごす内に、私のガラス工作技術が研究に役に立っていると実感できるようになり、やめたいという気持ちは『どのように良い装置を製作するか』という仕事の楽しさと悩みに変化し、今現在もガラス工作技術者として歩み続けています。

現在、ガラス工作室は名古屋大学全学技術センター教育・研究技術支援室装置開発技術系に属し、全学の依頼を受け付ける支援態勢に拡大しています。

近年の工作依頼は、大型装置や精密装置の製作が増えてきています。また、真空装置、低温装置そして溶媒などの蒸留装置の依頼も多く、これらの装置を製作するにあたって、真空や低温条件を満足させるなど種々の技術設計、そして、非常に高度な技術力とそれを支える広い知識が要求されるようになりました。同時に、これらの要求を満たすために、ガラス旋盤をはじめ精密工作に必要な研磨機を導入し工作技術の範囲を広めています。これらの設備充実は、全国のガラス工作室でもトップクラスになりました。

装置開発の結果、溶媒蒸留装置(第6419796号)真空排気兼不活性ガス導入装置(2000-326877)の国内外特許を取得しました。

また、社団法人日本化学会より化学技術功労賞を、社団法人日本分析化学会より有功賞を受賞する事も出来ました。

全国国立機関ガラス技術者研究会を発足し、会長として会の運営を行い、各大学においてガラス工作技術シンポジウムを開催し、技術交流を深める役割を行うようになりました。

技術の文化として、後継者の育成と技術組織運営の役割に力を入れていきたいと思っています。



ガラス工作を行う筆者

のだ としあき  
 1947年生まれ  
 全学技術センター教育・研究技術支援室装置開発技術系技術専門員

## 就活サプリーと就活サプリー塾に関わって

理学部地球惑星科学科4年  
吉村久美子

12月17日の就活サプリー塾の様子 様々な大学から約130人の学生が集まりました

就職活動が終わり、後輩のためにできることが何かないだろうかと思っていたところ、友達から「就活サプリー」という生協の企画に誘われました。

就活サプリーは、学生の視点で学生が本当に知りたいことを、企業を取材したり自分たちの経験をまとめたりして作られた冊子です。2年前から九州では、このような学生による冊子が作られていましたが、全国規模で展開されたのは今年が初めてなので何もかもが手探り状態でした。

私は2社の取材に行きましたが、実際に働いている人の仕事に対する考えや想いを直接聞くことができ、仕事をするということに対する意識を変えられました。パンフレットやインターネットで情報収集できた気でも、実際はそれだけでは足りないということを改めて思いました。企業訪問などをして、企業の人と直接話して社風を感じたり、社員の方の働くことへの考え方を聞くことは自分の働くことへの意識を高める上で大事だと思います。

企業の方とやりとりをして記事の校正をしていきましたが、記事の完成度を上げるために何回も校正作業を行うということもしました。電話やFAXを借りに行くために生協の事業連合と大学を何度も往復して大変でしたが、これもインターンシップのようないい経験になったと思います。

このようにして就活サプリーが作られていったのですが、文字だけではやっぱり伝わらないところもあるし、学生は一方通行の情報提供を受けるの

ではなく近い距離で話をしたいだろうということで、「就活サプリー塾」というセミナーを全国7箇所で開催することとなりました。東海地区では12月17日に名古屋の栄で開催されました。私は、この企画にはぜひ多くの人に来てもらって、働くことに対して新たな視点を身につけて欲しいと思い、広報担当になりました。いくつかの大学にピラを配りに行ったり、新聞に記事を投稿したりしました。特に直前は名大に的をしぼり、研究室におじゃまして直接説明をしました。結局約130人の参加があり、まだまだ課題は残っていますが、この企画で就職に対する意識を高めることができたのではないかと思います。

中心メンバーが4年生だったので、この時期はちょうど卒論で忙しい時期でしたが、お互いを励ましあいつつ企画を作っていました。逆に、こういう時期だからこそ強いつながりが出来たのかなとも思います。



就活サプリーのスタッフ 前列左から4人目が筆者

よしまら くみこ  
1983年7月14日生まれ  
徳島県出身

## アーチェリーをはじめて

葛山 あい アーチェリー部



かつらやま あい  
情報文化学部3年  
1984年生まれ  
愛知県出身

私は大学に入ってからアーチェリーを始めました。弓道に少しあこがれていたこと、アーチェリー部があるという高校を聞いたことがなかったので、大学で新しく始めるにはちょうどいいかなと思ったことがきっかけです。新しいスポーツを始めたというのがありますが、部活動を通じていろんな経験をすることができました。

1年生のころは、学生連盟に名古屋大学としてまだ加盟をしていなかったため、試合もほとんど無く、のんびり練習をしました。その頃は軽い弓しか引くことができなくても、楽しめるくらいかなという気持ちでした。1年生の終わりに、名古屋大学アーチェリー部として学生連盟に加盟をし、先輩も出場してこなかった試合が一気に増えました。試合中に審判から警告を受けたり、部品の取れた弓具をいつ直してよいかわからず、そのまま試合を続けたりと、

困ったことがありましたが、学連の大会が私にとって練習をもっと真剣に行う、よい転機になりました。

大学のアーチェリー場は、50mまでの短距離しか練習をすることができません。試合によっては、男子は90m、女子は70mまでの長距離が必要になります。たまたま私の家からあまり遠くない県の運動施設にアーチェリー場があり、大会前はそこに通うようにしました。3年の夏の個人戦の前は、本当に毎日一人で通いました。そこでも、いろんな人と知り合うことができ、毎日朝一番で練習を行う元気なおじいさんにスランプの時は励まされたり、障害者の方と同じで練習をし、海外での試合の話を知ることができたりしました。

私はあまり運動神経がよくないですが、本当にがんばれば、試合でよい成績を残すことができることを部活動を通して実感しました。夏の個人選手権大会の決勝戦で逆転できたときは、本当にうれしかったです。部の仲間と北海道から九州まで、いろんなところに試合に行くことができたこともよい思い出です。

今は就職活動のためアーチェリーをやめていますが、就職が決まったらまたアーチェリーを始めたいと思っています。そして、アーチェリーは年をとっても続けることができるスポーツなので、大学を卒業して就職をしても、アーチェリーを続けていこうと思います。

## 部活で得たもの

社本 学 舞踏研究会

しゃもと まなぶ  
理学部地球惑星科学科4年  
1983年生まれ  
愛知県名古屋出身

この文を読んでくださっている方へ、はじめまして。理学部4年の社本学と申します。

僕は1年の6月から4年の12月に引退するまで、名古屋大学舞踏研究会という競技ダンスをやっている部活に所属していました。

競技ダンスとは何かというと、社交ダンスをスポーツに発展させたものと言えいいのでしょうか、踊りの美しさを競うれっきとしたスポーツ、かなりの体力や技術力を要します。この部は怪しげな名前似合わず(?)ちゃんとした「部活」で、練習も結構ハードなんです。なぜか文系サークルの多く集まる学生会館で活動しています。金城・椋山・南山など他大学も含めて60人ほどが在籍しています。この部活で僕は様々なことを学びました。

競技の特性上、男女がペアで踊るのが原則のため、この部では2年の初めから4年の終わりまで固定カップルといって競技ではずっと同じ人と組んで踊ることになります。文章で書くと簡単ですが、生まれも育ちも考え方も違う人と長期間2人で一つのこと(ダンス)をするというのはとても難しいことで、お互いの意見がぶつかって喧嘩になることもよくありました。しかし、こういった経験をしたおかげで、相手を思いやる心や人間関係の難しさを学

ぶことができたと思います。

また、競技ダンス部は全国にかなりの数があり、中部、東部、関西など各ブロックに分かれて学生戦を自主運営しており、全国大会も行われます。僕は中部ブロックの長をさせて頂きました。また、部でも幹部をさせて頂いて、組織の上に立つという経験をしたことで考えさせられることは多くありました。一つのブロックや部という小さな「社会」の中にはさまざまな立場や考え方を抱えている人がいて、そこに属している人全員に幸せになってほしいという自分の願いと、現実にはそうではないというギャップに、どう折り合いをつけていくか、どう組織を動かしていくのがみんなにとって最善なのかということに、他の幹部たちと長時間話し合うこともよくありました。

このように、4年間部活にいたことで学んだこと、得たものは沢山あります。これらは今後社会に出て生活していくうえできっと役立つと思います。しかし、この部において得た最大のものは、沢山の先輩や後輩、同期などさまざまな人との出会いだと思います。これから生きていくうえできっとかけがえのない財産になると思います。忙しいとか大変だと思ったこともありましたが、この部に4年間所属して本当によかったと思っています。

## ライフル射撃部に入って

水野 祐輔 ライフル射撃部

みずの ゆうすけ  
農学部資源生物環境学科3年  
1984年生まれ  
愛知県出身

ライフル射撃部は特殊な部活であると思います。銃器、弾薬を扱っているという事が一つです。銃刀法や火薬取締法という法律に関わっていますし、少しのミスが大きな事故、事件の原因となります。銃の所持許可等のために何度か警察へも足を運びます。このことは、学生生活の中でも非常に大きな経験でした。他の体育会にもあるような上下関係等の精神的な概念以外にも、他では体験できない実際の法律に対しての姿勢や手続き等の社会的なことについても多く学びました。直接的に、ミスや怠慢が事故につながる事が明らかですので、厳しい意識が必要となります。ですがそのお陰で真面目さや高い集中力が身についたと思います。

また、様々な人と出会えることも、貴重な体験でした。部内には体育会系、文化系問わず色々な人がいて、新しい人生観を度々得ることができます。上級生は皆人間性が際立っていますし、経験豊富です。自分が部を引っ張っていかねばならないときは、リーダーシップが足りず、後輩たちに迷惑をかけてしまい、それを毅然と行っていた上級生の偉大さを多々感じました。凛としている様はかなり大人に感じましたし、尊敬します。自分もそうなら

なければいけないと感じますし、考えることにより人間として少しずつですが、成長する事ができています。同学年の親友と呼べるくらいの友達も多かったです。これほど色々相談できる仲間はいませんし、凄く大事な友達ができたと思います。感謝の念で一杯です。

競技に関しては、射的競技はやはりセンスとキャリアが多く関わってきます。ただライフル射撃は法律の関係で、皆大学に入ってから始める人がほとんどで、経験の差はありません。練習量だけでは負けないですし、他に取り柄もないので、練習に励みました。練習量は一番であるという自信はつきました。その結果かはわかりませんが、幸運にも中部大会で優勝でき、会長表彰も頂きました。こんな自分でも頑張れたことは、嬉しかったです。今後にとっても大きな自信となります。

まだまだ射撃でも人間性の面でも努力するべきところがたくさんありますので、これからも精一杯部活動に励んでいきたいと思っています。

## 全日本選手権～漕魂伝授 from 北川先輩～

中村 良 漕艇部



なかむら りょう  
経済学部3年  
1985年生まれ  
愛知県出身

企業、学生、日本の頂点を決める全日本選手権に、僕は男子舵手なしペアで出場した。名阪戦から時間がなく2週間という短い期間でクルーを組みなおし出場した。舵手なしペアという初めて乗る種目、試合では初めてやる整長という自分がリズムを作らなければならないポジション、短い練習期間ということや、全日本という大会の規模、企業や強豪大学が多数出場することに戸惑っていた。

この大会は、共に乗った北川先輩に助けられ、また多くのことを学ばせてもらった貴重な経験であったと思う。北川先輩は2週間という限られた期間でもあきらめることなく、僕に基礎から、じっくり丁寧に教えてくれた。ときには練習時間が普段は1時間くらいのところ、2時間、3時間になることもあった。その中で全日本でも勝てるということは何度も説いてくれた。

レース1日目、前回優勝のトヨタ紡織とあたった。レース開始前から無理だろうと思ってしまった。結果は2位だった。10秒の差をつけられた。しかし、気持ちで負けていなければもっと勝負できたと思う。

レース2日目、今度は緊張してしまい、思うようなレースができなかった。自分は2日目が一番緊張するとわかった。漕ぎもぐちゃぐちゃであった。

準決勝戦、このレースは気に入っているのだが、気持ちで負けず、絶対に最終日に残りたいという気持ちで望み、そして順位決定戦だが、最終日へつなげることができた。

順位決定戦、このレースはぼろぼろであった。ダントツの最下位で、順位決定に残れたからいいかというので気持ちが切れてしまっていた。

総じて、北川先輩が教えてくれたような理想の漕ぎができていなかったし、練習のときよりもできなかった。

僕がもっとしっかりしていればもっと上を狙えたので、北川先輩には、申し訳ないと思うのと、とりあえず結果を残せたということと、いろいろ学ばせてもらったということで感謝の気持ちでいっぱいです。

レースにおいては、練習においても、気持ちが重要、甘えや恐れ、慢心は大敵であるということ、北川先輩に教えてもらい、自分の能力、現在地が分かった。僕のオアーズマン人生として非常に貴重な大会だったと思う。

## ボートと小さな感動

北川 哲 漕艇部



きたがわ さとし  
工学部電気電子・情報工学科4年  
1982年生まれ  
石川県出身

私は今でこそボートが大好きだが、昔は嫌いな部類に入っていた。しかし、名古屋大学に入学して早々、何を血迷ったのかボート部に入部してしまった。水に濡れることも、人に合わせることも、頑張り続けることすらも嫌だった私が、ボート部に入部してしまったのだ。ボートは当然ながら水の上に浮かべる。ボートに乗れば水の上、それも水面ぎりぎり。ぎりぎりだからこそ、スピード感もあるのだが、ミスれば濡れる。ボートはイトなら9人も乗る。漕ぐのは8人だが、9人の息が合わないと、まともに進まない。合宿でいっしょに生活したりもする。ボートのレースは短いようで長い。6～8分程で終わるのだが、この間は全力。二百何十回の反復運動。

私がボート部に入部したのは、本当に血迷ったとしか考えられない。しかし、この部に在籍し、試合に練習に臨み続けられたのは、楽しかったからだ。(な

んというつまらんおちだ。)部活で、仲間と感情をともにすることもそうだが、ある特殊な空間が好きだったからである。川という自然の中で、水、雲、鳥を、魚を見て、その中に自分がある。すぐ近くを電車や自動車が走っているなかで、こんなことを考えられる空間である。この都市の中の小さな自然、その中のさらに小さな自分を感じることに、ボートを中心とした空間が背中の方の空間へ吸い込まれていくのを(艇は自分の向きと逆方向へ進む)感じることに2つの空間感覚が私を楽しませてくれた。これらの感覚を楽しむうちに、速くなっていく、レースでもそこそこ活躍できるようになっていった。ボートをやっていると、一体感、達成感が表に出てきやすいが、ボートに初めて乗ったときの、水の上にいる、前の世界が後退していく、横の世界が流れていくという感覚が昇華して、先の2つの空間感覚となり、私を導いてくれたと考えている。ものの始まりにあった、小さな「感動」というものを忘れることなく、発展させながら、今後もスポーツに勉強に取り組み、新たな世界を創って、より大きな感動を感じていきたい。

## ボクシングを通じて学んだこと

伊地知 大 ボクシング部



いちぢ だい  
工学部2年  
1985年生まれ  
愛知県豊田市出身

自分がボクシングに出会ったのは、高校1年のときでした。友達に誘われたのを機に近所のジムに入門し、それから大学に入りボクシング部に入部しました。しかし、自分が入部した頃、練習場は名古屋大学ではなく、中京大学と合同練習といったかたちをとっていました。練習環境などからやはり、部員一同自分たちの練習場がほしいという思いがありました。ボクシング部を部として正式に認めてもらい、練習場をもつためには、個人だけではなく、団体が結果を残すことが求められていました。部員は「団体総合優勝」という目標を掲げ、チーム一丸となり、練習に励みました。1年時は、成績もいまひとつという感じでしたが、2年の春の「中部学生選手権」

で見事に総合優勝を飾ることができました。ボクシングはずっと個人技だと思っていた自分ですが、スパarring、ミットをするにもパートナーを必要

とし、階級がかぶらないように先輩、後輩と話し合い目標体重までおとす、試合では声を出して応援するなど、部員相互の関係を築いていなければならず、とても一人の力で上達することはできないと実感させられました。そして人という関係を築くためにはどうすることが大切かという大事なことも学びました。

昨秋には、名古屋大学に念願のボクシングジムが設立されました。練習のたびに中京大学へ往復していた当時とくらべると格段に練習時間が増え、また、あらゆる面で練習環境もすばらしいものとなりました。おかげで部としての活動もしっかりしたものとなってきました。今年もその現状に甘んずることなく、より自分たちのパフォーマンスを磨き、結果を残していきたいです。

多くの人はボクシングと聞くと暴力や喧嘩といったイメージがうかぶのではないのでしょうか。基本的には殴り合ってどちらがより強いかを競う格闘技です。しかし、このスポーツはパンチを当てるテクニック、よけるテクニック、試合ごとの戦術、かけひきと予想以上に奥が深いです。相手に勝つためには、試合だけでなく、練習一つ一つに関しても頭を使って考えることが必要とされます。しかし、何をやるにおいても、このことは大事なことで、今の自分に大いに役に立っています。ボクシングは、いろいろなことを教えてくれ、成長させてくれる自分の人生の中で一番はまったスポーツです。だからこれからもこのスポーツを大切にしていきたいと思えます。

## 勝利に向かって―大学における部活動―

弓道部 後藤 美保



名古屋大学弓道場での練習風景

を果たすことができました。これもひとえに、平日頃よりの多くの方々からいただくご支援と、部員ひとりひとりの頑張りのおかげであると思います。

### 勝利の意味

こういった部活動においても、ひとつの勝利を得るといことは並大抵のことではありません。特に団体競技においては、チームワークなど、個人ブ

### はじめに

平成17年6月に行われた東海学生弓道選手権大会での男子団体優勝、また、同年7月に行われた全国七大学総合体育大会（七大学戦）での女子団体優勝により、この度体育会会長表彰をいただきました。特に七大学戦においては、女子が3年連続で団体・個人ともに優勝

レーだけではなく多くのものが要求されます。単に運がよかったからとか、たまたま調子がよかったというだけでは通用しない世界がそこにはあります。そのなかで、自分たちのチーム全員の力が遺憾無く発揮され、気持ちを通じ合ったときに得られるものが勝利であると思います。それが意味するのは、自分たちの努力の成果といえるでしょう。

### 勝利に向かって

では普段の練習から、和気あいあいと取り組んでいけばいいかということ、実はそれが簡単なことではありません。まず部活動に取り組むには多くの時間を必要とします。チーム内で意見がぶつかり合うことも多くあります。努力してもうまくいかず、思うように成果を得られないことさえあります。そうした困難に際してもなお、部活動を続けようと思うのは、勝利したときの喜びであるとか、チームで成果を出せたときの楽しさであるとか、そうしたものを得たいという強い思いがあるからです。

部活動は強制されて行うものではありません。全て自分の意志でやるものです。だからこそ、自分の意志の強さが最大限に試される場であるといえます。私たちの対戦するのは、不動の的です。結果は全て自分自身に返ってきます。勝負の相手は自分自身なのです。

これから、自分に負けないよう、部活を通じて頑張っていきたいと思えます。

ごとう みほ

教育学部人間発達科学科2年  
愛知県出身

## 名古屋大学体育会会長表彰を受けて

ライフル射撃部 小木曾拓也



名古屋大学ライフル射撃場での練習風景

今回、平成17年9月23日から25日にわたって行われた第34回中部学生ライフル三姿勢大会において団体優勝した事により、体育会会長表彰を頂き誠に光栄に思います。今回の団体優勝は私個人の力だけではなく、同じく団体射手である福岡、曾田の活躍の結果であり、二人には大変感謝しています。

現在、私はライフル射撃部に入って2年になります。ライフル射撃というものには多くの種目がありますが、私たちが行うのはエアライフルといい、10メートル先の標的に描かれた直径3.05センチメートルの円形の黒点を狙う競技です。標的の中心に近いほど高い点数が与えられ、満点は10点です。ただし満点は直径わずか0.5ミリですから、10点を確実に撃ち抜くようになるまでは何度も練習を繰り返さなければなりません。

私が1年生のとき、部活動では自由に練習ができ、また、優れた上級生か

ら指導を受けることができました。そのため、練習に集中でき現在の実力が得られたと思います。

そして今は2年生となり、1年生を指導するとともに、部活動の運営を行う立場となりました。そのため、今は自分の練習のことだけではなく、部活動全体での練習のやり方、時間配分、指導など多くのことを考え実行していかなければなりません。これらは部活動を円滑に行うために責任のある仕事です。しかし、同時に自由に采配を振ることができ、良いと考えることを実行に移すことができます。そこで現在、今の立場としてやるべきこと、すなわち、部員全体のレベルアップを目指したいと思えます。

特に今、私は部活動において選手強化という役割にあります。これは名前の通り、部員の実力の向上をはかること、また、試合において団体射手の選考を行うことが仕事です。そこで現在、新しい練習機器の導入を行っています。今までになかった練習機器で、活用法はまだまだ模索中ですが、今後、その機器を使い、より良い練習が行えるように考え、実行していきたいと思えます。

最後になりましたが、今回の会長表彰を頂いたことは、私にとっても、また、ライフル射撃部にとっても素晴らしい栄誉となりました。今後とも、会長表彰に値する業績を挙げられるよう、部員の練習の指導を行うとともに、自身も練習を重ね、更なる高みを目指していきたいと思えます。

おぎぞ たくや

農学部応用生物科学科2年  
1986年生まれ 岐阜県土岐市出身

## 部活動を通して何を得るか

漕艇部 堤 貴彦



男子舵手つきフォアで優勝した平成17年関西選手権競漕大会表彰後の記念撮影 前列右が筆者

僕は入学した時から部活をやろうと決めていた。友達をつくるため、そして体を鍛えるためだ。今振り返ってみるとこの二つのことは手にすることができたと思う。特に、入学当初思っていたより深い仲間と出会うことができたのは貴重なし幸運なことだ。ただ、予想もしていなかったこともあった。自分の中身が変わり成長したのだ。

例えば、自主性である。僕は部活を高校の延長線上にとらえていたが、入ってみるとほとんどの人が本気で努力し悩んでいた。考えてみれば進んで莫大な時間と金を費やしているのだから本気でやるのは当たり前だろう。しかし僕はそんなことには気が付かずに、練習の厳しさばかりに目がいて不満を持ち、しばらく部活から離れていた。するとそこには深い仲間も「勝ち」の心からの喜びもなかった。そこで初めて、自分でやりたいことを選ぶということ、中途半端は無駄なことだということを理解した。それが自分で選択するということなのだろう。言葉ではよく聞くし理解していたつもりだった。ただ改めて体でわかったのは嬉しい。

僕は部活で例えばこんなことを得ることができた。それが人より遅いような気もする。しかし自分の行動の意味を考えることで、自分自身が成長していくことができるはずだ。

つつみ たかひこ

工学部電気電子・情報工学科2年  
1985年生まれ 愛知県出身

## 4年間の部活動を振り返って

相撲部 大崎 貴弘



4年生最後の大会であるインカレの団体戦に臨む筆者

私が相撲部に所属して早くも4年の月日が流れようとしています。この4年間、思えば様々なことがありました。特に4年目の今年は、部の幹部として中心となって活動し、多くのことを学ぶことが出来ました。また、選手としても国公立大会優勝、七大戦5連覇、インカレBクラスで初勝利などの数々の戦績を挙げる事ができました。そのレギュラーとしての経験は自分を成長させてくれたと思います。特に私は中堅であり、もう後がないという状況で出番がまわってくることもあり、そのような切羽詰った状況というのはこれまで体験したことのないものでした。そこで、個人でなくチームとしてどのように相撲をとるかを考えることはとてもいい経験にな

ったと思います。相撲は個人競技ですが、醍醐味は団体戦にあると思います。「一勝一勝を積み重ね、5人が一丸となり勝利する。」その一体感と勝利した時の感動はきっと、今後の人生の中でもなかなか味わうことは出来ないでしょう。

しかし、この4年間何もかも順風満帆であったわけではありません。部活と学業、アルバイトの両立に悩み、一度部から遠ざかったこともありました。その後、部活動のない学生生活に物足りなさを感じ、結局部に復帰しました。今となってはその選択は間違っていなかったと思います。相撲部での活動は相撲競技だけではなく、クラブでのイベントや、毎年多数の参加を得て行っている学内相撲大会などを通じ、相撲を世の中に広める活動に携わったことはよい経験になりました。グローバル化が進む昨今、ローカルなコンテンツの重要性が叫ばれています。その最たるものである日本の国技「相撲」のよさを理解し、それを世間に向けて発信できたことは我々自身にとっても誇りですし、相撲人気の凋落が言われる中、学生相撲という立場から相撲の普及に一役買っているということも、また、誇りです。

最後になりましたが、この4年間、相撲部で活動できたのも、私のことを理解してくれた両親や支えてくれた仲間たち、いつも温かく指導していただいた師範など、様々な方々のおかげだと思います。その方々にこの場をお借りしてお礼申し上げたいと思います。4年間本当にありがとうございました。

おおさき たかひろ

教育学部人間発達科学科4年  
1983年生まれ 愛知県出身

## 名古屋大学体育会ボクシング部主将として

ボクシング部 岡本 和之



中部学生ボクシング選手権大会表彰後の記念撮影  
前列左から3人目が筆者

10年目にして初めての出来事でした。やはり強豪の私立大学の選手には技術的に見劣りする部分がある事は否めませんが、日頃の練習で培った根性と精神力とで互角の勝負を繰り広げることが出来ました。その結果、全6階級中で優勝2階級、準優勝1階級、3位1階級となり、念願だった初の総合優勝を遂げました。そして11月の学内練習場完成は部として最も大きな出来

事でした。学内に練習場が出来た前は、中京大学ボクシング部の練習場をお借りして、合同で練習をしていました。学内関係者の方々やOBの方々の御支援、御協力のおかげで立派な学内練習場を有することが出来ました。この場をお借りして再度深く御礼申し上げたいと思います。新練習場で練習が行えるようになってからは移動時間の節約はもちろんの事、部としてのまとまりも大きくなりました。この様な環境を与えて下さった方々への感謝の気持ちは部員一同いつまでも忘れる事は出来ません。

ボクシングと聞くと多かれ少なかれ、「野蛮だ、危険だ」等のイメージを抱かれる方もいらっしゃるでしょう。私自身も大学に入学してボクシングを始めた頃はそのようなイメージも抱いていました。しかしいざ練習を重ね試合を行うと、それらのイメージ以上にスリリングに満ち溢れた、日頃の練習量がものを言う魅力のあるスポーツだと分かりました。確かに、試合に出ようものならハードな練習は不可欠ですし、辛い事もたくさんありますが、その様な時は部の仲間と励まし合い共に乗り越え同じ目標に向かって走り続けます。ボクシングに教えてもらった「目標に向かって努力することの大切さ」を、大学を卒業して社会に出ても忘れる事なく、常に目標に向かって走り続ける人でありたいと思います。

おかもと かずゆき

理学部地球惑星科学科3年  
1983年生まれ 大阪府出身

# 「名古屋大学附属図書館友の会」の活動

## 名古屋大学附属図書館友の会事務局

「名古屋大学附属図書館友の会」は、2004年10月に誕生した任意団体で、本学附属図書館の利用者や、特別展示会や講演会に参加する市民、教職員、学生などさまざまな人たちが集まって、利用者同士の繋がりを構築しながら活動を行っています。2005年末現在で、会員数は226名となっています。

国立大学附属図書館は、現在、資料の利用では、一般市民にかなりの部分が開放されています。本学の附属図書館でも、学外からの来館者は、中央図書館だけでも2003年度24万人から2004年度35万人というように増加しています。

友の会の目的は、それらの来館者を主な対象にして、本学附属図書館における市民、学生及び図書館職員との交流を軸に、図書館関連情報の提供、図書館の社会連携・貢献活動の支援などを目指すことにあります。

具体的な活動としては、会員への情報提供、会のニュースなどの発行や、会員同士の交流・情報交換、図書館が開催する各種行事への支援などを行うことになっています。

また、会員には、附属図書館から会員特典が与えられ、中央図書館利用証の交付、図書館広報誌『館燈』（季刊）、附属図書館研究開発室発行の『Libst Newsletter』（年3回）の送付、附属図書館主催の特別展示会・講演会などの開催案内などが毎回送付されます。こうした活動を支えるために、一般会員では、年間2千円の会費制となっ

ています。

友の会の活動は、当初は、会員特典の提供が主でしたが、2005年5月からは、「附属図書館研究開発室オープン・レクチャー」への参加が会員にも一部開放されています。

同年10月からは、「トークサロンふみよむゆふべ」という独自の行事も始めています。図書や、古文書、手紙などの文字資料や絵画を題材にした「かたり」をメインとし、それに参加者の自由なトークを交えて、週末の短い宵を楽しもうという集いです。職業を持つ会員の参加を配慮して、午後6時半～8時という時間を設定しています。2005年に2回開催し、各会30～40名が集い、時間を忘れて語り合いました。以後もテーマを選びながら年4回ぐらいの開催を予定しています。会員外の方も参加は自由、無料です。なお、詳細は、附属図書館友の会のホームページ (<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/tomo/>) をご覧ください。



「トークサロンふみよむゆふべ」（第1回 2005.10.14）  
「十七世紀の恋文（ラブレター）」かたりは、前野みち子国際言語文化研究科教授

## 第4回坂田・早川記念レクチャーを開催

●大学院理学研究科

第4回坂田・早川記念レクチャーが、12月17日（土）、名古屋市科学館において開催され、1964年から6年間、本学理学部に在職していた杉本大一郎放送大学教授（東京大学名誉教授）が、「宇宙から広がる科学」と題して講演しました。

このレクチャーは、名大物理の草創期を築かれた故坂田昌一、故早川幸男両教授を記念して、次世代の優れた研究者を育成することを目的として設けられたものです。

杉本氏は、宇宙はどのように、そして、なぜ進化しなければならないのかといった多体問題を解くために、超高速専用計算機プロジェクトに着手し、専用計算機“GRAPE”を開発し、世界に展開していったエピソードや学問観等の自身の経験を軸に話しました。講演終了後には、高校生を中心に、多くの質問が出されるなど、若い人々に「科学の楽しみ」を語りかけるにふさわしいものとなりました。



講演の様子

## 人間・社会環境学の構築ワークショップを開催

●大学院環境学研究科・情報文化学部

大学院環境学研究科及び情報文化学部は、1月7日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、学内構成員及び一般市民を対象として、「交通事故の環境学」をテーマに、人間・社会環境学の構築ワークショップを開催しました。

このワークショップは、交通事故に関わる諸問題は、人と環境との相互影響過程に関わるテーマであるという認識に基づいて企画されたもので、学部学生、大学院学生、教職員及び一般市民約60名の参加がありました。

ワークショップは、川口潤同研究科教授の司会進行により行われ、大阪大学大学院医学系研究科の武田裕教授及び峯野隆広氏が、「貨物運送業界における睡眠時無呼吸症候群（SAS）のスクリーニング法の開発とその結果」と題して、交通事故につながる身体要因としての睡眠障害に

ついて、蒲澤秀洋名古屋市総合リハビリテーションセンター一部長が、「交通事故による頭部外傷の認知障害と脳循環代謝」と題して、交通事故により脳外傷を生じた場合の諸問題について、また、三浦利章大阪大学大学院人間科学研究科教授が、「交通場面における注意の働き：認知心理学の立場より」と題して、交通事故を生じる人間の認知メカニズムの特性について講演しました。講演を通じて、同研究科社会環境学専攻が取り組むべき研究のフロンティアが紹介されるとともに、講演後には、活発な質疑応答が行われるなど、充実したワークショップとなりました。

## シアクラ大学と合同セミナーを開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、11月30日（水）、スマトラ沖地震（2004年アチェ・アンダマン地震）最大の被災地インドネシアのバンダアチェにあるシアクラ大学において、同大学理学部と合同で、セミナー「2004年アチェ・アンダマン地震と津波」を開催しました。

同研究科では、2004年12月のスマトラ沖地震について、



セミナーの様子

地震学等の自然科学や、社会学・心理学の社会科学の研究者が連携し、2005年1月末のバンダアチェでの現地調査から、文理融合の調査研究に取り組み、これまでにGPS観測、ワークショップ等を行うとともに、9月にはシアクラ大学理学部と部局間学術交流協定を締結しました。バンダアチェでは、特に、8月の自由アチェ独立派とインドネシア政府との和平協定締結以降、復興が急速に進んでいますが、シアクラ大学には地震学の研究者が在籍せず、スマトラ沖地震やバンダアチェの直下を横断するスマトラ断層等に関する理解が遅れていることから、今回のセミナーを開催しました。

セミナーには、本学の研究者や大学院学生11名、シアクラ大学の研究者や学生、バンダアチェ市職員、NGOスタッフなど200名を超える参加があり、安藤同研究科附属地震火山・防災研究センター長をはじめ、研究者が今回の地震と津波の背景や今後の展開等について説明し、参加者からの質問にも丁寧に答えていました。

同研究科では、地震後の復興は自然科学、社会科学のいずれの課題でも長期間を要するため、今後もシアクラ大学との共同研究に引き続き取り組むことにしています。

## 地球水循環研究センターが公開講演会を開催

地球水循環研究センターは、12月17日（土）、シンポジオンホールにおいて、本学21世紀COEプログラム「太陽・地球・生命圏相互作用系の変動学」との共催、愛知県、名古屋市、名古屋地方気象台及び日本気象学会中部支部の後援を得て、一般市民を対象とした第5回公開講演会「植生が気候を変える？」を開催しました。



あいさつする上田地球水循環研究センター長

講演会では、初めに、上田同センター長によるあいさつ及び安成哲三同センター教授による趣旨説明があった後、植生が大気・地表面間の水・エネルギー循環を介して、気候とその変化にどのような影響を及ぼしうるのかといったテーマについて、5名の研究者が、一般の方々にも理解できるように丁寧に講演し、寒波が襲来したにもかかわらず訪れた約80名の参加者は、熱心に聞き入っていました。これらの講演を通じて、環境としての気候が植生の分布を単一方向で規定しているのではなく、両者が密接に相互作用して成り立っていること、人間活動の影響も含めた気候変化を考える上で、植生の積極的な役割を理解することの重要性が示されました。また、講演終了後に行われた総合討論では、活発な質疑応答が行われるなど、充実した講演会となりました。

## 公開セミナー「先端技術が拓く未来のバイオ研究」を開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、12月15日（木）、野依記念学術交流館において、第5回公開セミナー「先端技術が拓く未来のバイオ研究」を開催しました。

このセミナーは、同施設が平成13年度から開催している公開学術講演会（学内外の研究者が最新の研究成果をわかりやすく紹介）とは趣を変え、バイオ企業の研究開発者に最新のテクノロジーの解説と今後の開発動向等を紹介してもらい、研究者の要望について議論する場を提供することを目的として開催されたもので、約70名の大学や企業の研究者の参加がありました。

セミナーでは、石浦施設長のあいさつの後、タカラバイオ(株)の峰野純一氏が、「smallRNAの探索・利用およびその研究ツールのご紹介」と題して、最近注目されているmiRNAの解析とこれらのサービス業務について、(株)日立ハイテクノロジーズの甲田公良氏が、「日立製新型LC/MSを使ったプロテオーム解析」と題して、ナノ流量を制御できるLCの開発とその応用例について、また、オリンパス(株)の幸村心元氏が、「観察しながら光刺激！－光刺激スキャナーつき共焦点レーザー顕微鏡FV1000のアプリケーション例のご紹介－」と題して、遺伝子レベルから固体レベ

ルまで観察できる技術を搭載した共焦点レーザー顕微鏡について紹介しました。また、セミナー終了後には、各企業の製品について個別に相談する時間が設けられ、活発な意見交換が行われました。

同施設では、優れた実験研究は、分析試薬や機器の利用による高精度なデータの取得に依存する機会が多いことから、今後も、学術講演会に加え、こうしたテクノロジーセミナーを企画していく予定です。

## アジア農科系大学連合（AAACU）とワークショップを開催

●大学院生命農学研究科・農学国際教育協力研究センター

大学院生命農学研究科及び農学国際教育協力研究センターは、1月13日（金）、豊田講堂第一会議室において、アジア農科系大学連合（AAACU）とともに、「Development of integrated curriculum and joint degree program in AAACU network : perspectives and constraints」をテーマとしたワークショップを開催しました。



あいさつする松田生命農学研究科長

このワークショップは、総長裁量経費を得て開催されたもので、AAACU加盟校（機関）である本学、カセサート大学（タイ）、チェンマイ大学（タイ）、国立中興大学（台湾）、ハノイ農業大学（ベトナム）、レイテ州立大学（フィリピン）、東南アジア文部大臣機構農業高等研究地域センター（SEARCA）、ソウル大学（韓国）及びカンボジア王立農業大学から計30名の教員が参加しました。

ワークショップでは、堀江未来留学生センター助教授が、「Lessons from experiences of EU universities : International collaboration and joint degree program」と題して、特に、EUにおける大学間の共同教育プログラムについて基調講演を行った後、これまでに本学とAAACUが共同で進めてきたプロジェクト（e-Learningを介した大学院教育）の到達点及び今後の課題の整理が行われました。また、11、12日には、WebCT本部より講師を招いて、WebCT Vistaの研修コースが開講され、海外からの招へい者が、このe-Learningのコース運用について研修を受けました。

## 今年度の農業教育公園・講演会が終了

●大学院生命農学研究科附属農場



ウォーキングをする参加者（第3回講演会）

今年度の地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の第3回が、11月19日（土）、第4回が、12月17日（土）に、大学院生命農学研究科附属農場内の農業館において開催されました。

第3回では、島岡総合保健体育科学センター長が、「健康と運動」と題して、高齢化社会を迎えて、いつまでも自立した生活が求められている現在、健康維持のために家庭でできる運動とそれによって期待される効果等についてわかりやすく説明した後、家庭でできるレジスタンス運動とウォーキングを実践しました。

第4回では、古橋忠晃学生相談総合センター助手が、「健康とストレス」と題して、「こころ」とは何か、脳とこころの関係について盛んに研究が行われている現状について話した後、心的外傷後ストレス障害、統合失調症、主婦のうつ病等の症例について紹介し、講演後には、参加者から多くの質問がありました。

## ICCAE2005年度 第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



オープンセミナーの様子

農学国際教育協力研究センターは、12月16日（金）、タイ王国・スコタイオープン大学（STOU）農業普及協同組合学部の Sunan Seesang 助教授を講師として、「STOU Joint International Doctoral Program」をテーマに、2005年度第6回オープンセミナーを開催しました。

セミナーでは、ビデオを用いてスコタイオープン大学の概略が紹介された後、米国南部普及学部長協会（ASRED: Association of Southern Region Extension Directors）との共同博士課程プログラムについて説明がありました。セミナーには、カンボジア王立農業大学の教員の他、多数の参加があり、教育プログラムの質の向上など、様々な視点に立って活発な質疑応答が行われました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年12月16日～平成18年1月15日]

記事	月日	新聞等名
1 与党税制大綱に定率減税の2007年廃止明記 竹内信仁・経済学研究科教授は「景気の足腰を見極める必要がある」と話す	12.16 (金)	中日 (朝刊)
2 研究スポット：友田クリニック院長・友田豊・本学名誉教授 ナスの抽出物塗布でいぼの治療	12.16 (金)	中日 (朝刊)
3 産業技術戦略シンポジウム「戦略的技術開発と産業技術人材育成」が11月21日に開催され、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授がプレゼンテーションとパネルディスカッションに参加	12.16 (金)	日経 (朝刊)
4 東海地方に外国企業を呼び込み地域経済の活性化を目指す「グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ」運動を強化するため、官民一体の推進組織「グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ・センター」を平成18年2月下旬に設立 平野眞一総長ら15名程度で理事会を構成し、会長に日本ガイシ会長で日本経団連副会長の柴田昌治・全学同窓会副会長が就任	12.17 (土) 1. 9 (日)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
5 叙位叙勲：従五位 高取一之助・元医学部附属病院事務部長	12.17 (土)	読売
6 ヒマラヤ氷河湖 温暖化で決壊危機：ほぼ毎年現地調査し、98年からブータン政府に対策の必要性を提言してきた上田豊・環境学研究科教授は、特にルゲ湖と近くにあるトルトミ湖、ラフストレル湖の3つを挙げ、氷河湖の決壊の連鎖を危ぶむ	12.17 (土)	朝日 (夕刊)
7 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 端正、写実なガンダーラ仏は身近な存在	12.18 (日)	中日 (朝刊)
8 名古屋市民約70人が参加してきた大規模な相生山ヒメボタル幼虫調査の結果報告会が、17日に本学で開催された	12.18 (日)	中日 (朝刊)
9 松岡信・生物機能開発利用研究センター教授、坂本知昭・東京大学助手らの研究チームは、イネの葉を直立させ密集状態で栽培すると通常よりも収量が30%増やせることを発見し、遺伝子レベルでその仕組みを解明 芦荻基行・生物機能開発利用研究センター助教授コメント「理論的には収量アップにつながると考えられてきたが、今回それが確かめられた」	12.19 (月)	日刊工業 他2社
10 理学部教授だった故・坂田昌一氏、故・早川幸男氏の業績をたたえて設けられた次世代の研究者の育成を目指す「坂田・早川記念レクチャー」が17日に名古屋市科学館で開催された	12.19 (月)	中日 (朝刊)
11 法学部公開講座「なぜ男女共同参画か？どのような男女共同参画か？」20日開催 講師は田村哲樹・法学研究科助教授	12.19 (月) 12.20 (火)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
12 法学部公開講座・特別企画「裁判員制度を考えるー法曹三者と語ろう刑事司法について」1月28日開催	12.19 (月)	中日 (夕刊)
13 ときめき時日記：丹羽亜衣さん・本学学生 正面から勝負した大学院合格	12.20 (火)	中日 (朝刊)
14 天文学講演会「最新の宇宙像ーブラックホールから銀河形成までー」23日開催 福井康雄・理学研究科教授らの話しなど	12.20 (火)	中日 (朝刊)
15 市民公開講座「シンクロトロン光で明かす生命と宇宙」1月9日開催 田原譲・エコトピア科学研究所教授ら3人の研究者が発生原理や最先端の研究成果について話す	12.20 (火) 1. 7 (土)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
16 愛知万博の収益金の使い道について方向性を検討する「2005年日本国際博覧会基本理念継承発展検討委員会」の初会合が20日に開催され、平野眞一総長が副委員長に選出された	12.21 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
17 20日、足立守・博物館長の後任に西川輝昭・同教授を、鈴木和博・年代測定総合研究センター長の後任に中村俊夫・同センター教授を選出し、石浦正寛・遺伝子実験施設長を再任した	12.21 (水)	中日 (朝刊) 読売
18 医学部附属病院に新しい中央診療棟が完成 平成18年1月から集中治療室 (ICU) など一部施設の供用が始まり、秋に全面稼働の予定 延べ床面積は約4万3千平方メートルで全国の国立大学病院の中でも最大級	12.21 (水) 12.23 (金)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
19 人間・社会環境学の構築ワークショップ「交通事故の環境学」1月7日開催	12.21 (水)	朝日 (夕刊)
20 第2回愛・地球博理念継承エリア検討委員会 (委員長：平野眞一総長) が21日に開催され、万博収益金の活用の可能性など費用面に関する議論が展開された	12.22 (木)	中日 (朝刊) 読売
21 本学や産業技術総合研究所、製品評価技術基盤機構などの研究チームが麹菌のゲノム解読に成功	12.22 (木)	中日 (朝刊) 他3社
22 21日、浪川幸彦・多元数理科学研究科長の後任に金銅誠之・同研究科教授、中西久枝・国際開発研究科長の後任に西村美彦・同研究科教授を選出し、澤木宣彦・工学研究科長・工学部長、松田幹・生命農学研究科長・農学部長、島岡清・総合保健体育科学センター長をそれぞれ再任した	12.22 (木)	中日 (朝刊) 読売
23 本学大学院で学ぶ留学生を対象とした英語による初の「読売新聞特別講座」の平成17年度最終講義が21日に法学研究科で行われた 講座は「記者が見る世界、アジア、日本」をテーマに、10月から15回開講され、毎回約30人が受講した	12.22 (木)	読売
24 第67回東海学生駅伝競走大会で63年ぶり2度目の優勝を果たした本学陸上競技部監督の金尾洋治・愛知県立看護大学教授は、「私大とは入学時点の力は劣るが、今年はメンバーがそろっていた。いけると思っていた。」と話す	12.22 (木)	中日 (夕刊)
25 本学がアジア各国で進めている法整備支援事業に、文部科学省が各国立大学の意欲的な取り組みを重点的に支援するために設けた「特別教育研究経費」の2006年度予算の中から5400万円が割り当てられた また、エコトピア科学研究所が正式に本学の附置研究所として認められ、研究推進経費として1千万円が予算措置されるとともに、大阪大学や九州大学などと進める「超高压電子顕微鏡連携ステーション」には、共同研究などの費用として、970万円がついた	12.23 (金)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年12月16日～平成18年1月15日]

記事	月日	新聞等名
26 本年度の名古屋市都市景観賞「まちなみ部門」に、「本学の建物と地下鉄出入口」が選ばれた	12.23 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
27 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 インド仏教彫刻の原点であるマトゥラー一仏	12.25 (日)	中日 (朝刊)
28 スマトラ沖地震で大きな被害を受けたインドネシアのバンダアチェに、平成17年1月から11月にかけて計5回にわたり調査団を派遣してきた環境学研究科が、地震発生から1年の26日に調査報告会を開催	12.25 (日)	中日 (朝刊)
29 法学部公開講座・記念講演「私の目から見た法律家と裁判ーオウム事件を通して」2月3日開催	12.26 (月)	中日 (朝刊)
30 名大サロンの主役：秋庭史典・情報科学研究科助教授 芸術は歴史抜きで楽しもう	12.27 (火)	中日 (朝刊)
31 第4回読売・大学中部地区懇話会が19日に開催され、本学など東海3県の22大学から学長や事務局担当者ら44人が参加し、「大学に求められる新しい時代の人材育成」をテーマに、活発な意見交換が行われた	12.27 (火)	読売
32 学生街ダンス：遠藤秀一さん・本学学生 「稲むらの火」を今に活用	12.27 (火)	中日 (朝刊)
33 外国人が話す日本語サロン「陽が沈む国：モロッコ」1月14日開催 カリーム・ハムザウィさん・本学学生が話す	12.27 (火)	中日 (朝刊)
34 本学の女性教員比率を増やすために女性を積極的に採用する人事方針と、女性研究者の働く環境を改善するため、来年4月に大学直営の「こすもす保育園」をキャンパス内に開設することを発表	12.28 (水)	毎日 (朝刊) 読売
35 環境学研究科は、アジアや中南米諸国で地震や津波、火山の観測に取り組んでいる若手研究者や技術者の研修コースを2006年度に設置 木股文昭・環境学研究科附属地震火山・防災研究センター助教授は、「専門の研究者の育成こそが防災への第一歩」と話す	12.28 (水)	中日 (朝刊)
36 大学教育の一端を社会に広く発信するため、計25の授業で使用している「教材」のインターネット上での無料公開を27日に開始 平野眞一総長は「高校生や留学生に見てもらいたい。教員同士が交流、参考にすることも期待している」と話す	12.28 (水)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
37 ベンチャー・ビジネスの創出を考える企業や起業家が入居する「名古屋医工連携インキュベータ (ふ化器)」施設が完成 施設の設置者は、中小企業基盤整備機構で、本学、名古屋工業大学、名古屋市立大学の3大学と連携し、「大学発ベンチャー」を特色に掲げる	12.28 (水)	中日 (朝刊)
38 回顧2005愛知：3 公共交通、経営苦戦 森川高行・環境学研究科教授は、「公共交通に多少の赤字はやむを得ないが、現在の日本では、無理やりでも黒字計画を出さないと建設に許可が出ないシステムになっているのが誤った需要予測につながっている」と話す	12.28 (水)	読売
39 学内施設の吹きつけアスベストの使用状況に関する調査結果を発表 いずれも施設利用者への影響はない	12.28 (水)	毎日 (朝刊)
40 相次ぐ科学・技術者不正、なぜ：耐震強度偽装事件について、福和伸夫・環境学研究科教授は、「コスト削減や成果至上主義に対するあせりがあるが、結局はモラルの問題に行き着く。論文偽装と似ている」と話す	12.29 (木)	中日 (朝刊)
41 展望2006：後房雄・法学研究科教授 首長の政治的指導力に加え、経営能力が一層問われる	12.29 (木)	日経 (朝刊)
42 モンゴル国立大学の法学部に「日本法教育研究センター」を平成18年9月に開設 現地との調整にあたる中村真咲・本学研究員は、「モンゴルの法整備は、ドイツなども支援しているが、歴史や文化の相違点が多く進んでいない。日本の支援に対する期待は高い」と話す	12.30 (金)	読売
43 万博の年の終わりに：ロボット競演 福田敏男・工学研究科教授の研究室が出展した超精密人体ロボット「イブ」は商品化され20日に初出荷された 開発者の池田誠一さん・本学学生は、「万博に出て補助金をもらわなければ、まだ開発できていなかった」と話す	12.30 (金)	朝日 (朝刊)
44 異郷の地でたたかいたかに 豊田の外來生物たち：ミシシippアカミミガメ 岡田夕季さん・本学学生	1. 1 (日)	矢作新報
45 中央図書館が所蔵する学習用図書約20万冊を5日から一般市民にも貸し出すことを決定 当面3月末までの試行	1. 3 (火)	中日 (朝刊)
46 ハタラク12：将来の夢を「トヨタのチーフエンジニア」と決めている上田健人さん・教育学部附属中学校生は、12歳の頃から準備を始め、昨年11月、好きな職業人にインタビューする授業では、迷わずトヨタの吉田健常務に会いに行った	1. 3 (火)	朝日 (朝刊)
47 気象予報士で、今は環境政策を学ぶ杉山範子さん・本学環境学研究科学生は、ムダを止め、生命に優しく暮らすために何をすればいいのか、自分自身で考えるきっかけの「素材」を「伝える」すべを探している	1. 3 (火)	中日 (朝刊)
48 ブルガリア人留学生のキロワ・スベトラさん・本学文学研究科学生が「日本語ブルガリア語の慣用句ことわざ」を発刊 「ブルガリアと日本の相互理解の手助けになればうれしい」と話す	1. 5 (木) 1. 6 (金)	読売 中日 (朝刊)
49 法学部公開講座「ヨーロッパの政治動向」17日開催 講師は小野耕二・法学研究科教授	1. 5 (木)	日経 (朝刊)
50 DNA から細胞、臓器まで体内のさまざまな大きさの組織の仕組みや機能を、ロボットなどの工学実験装置を使い、物理的に分析する世界で初めての新分野の研究に、福田敏男・工学研究科教授らの研究グループが今年から本格的に着手 福田教授は、「工学的な手法で生命現象や組織の機能発現の仕組みを統一的に解析すれば、バイオ・医療分野の研究発展に資することができる」と話す	1. 6 (金)	中日 (朝刊)
51 経済教室：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授 科学技術、公共性重視を	1. 6 (金)	日経 (朝刊)
52 メガバンク「三菱東京UFJ銀行」始動 どうなる東海金融市場：家森信善・経済学研究科教授コメント「地元の金融機関としてのアイデンティティーは薄れるだろう」	1. 6 (金)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年12月16日～平成18年1月15日]

記事	月日	新聞等名
53 米トムソン社が「不斉触媒」に関する過去10年間の論文の引用ランキングを発表 研究機関別で本学は5位、研究者別では理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授が2位	1. 6 (金)	日刊工業日経 (朝刊)
54 第10回名古屋大学理学懇話会「生き物の語る地球史」12日開催 小澤智生・環境学研究科教授、渡邊誠一郎・環境学研究科助教授が講演	1. 6 (金) 1.12 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
55 「女子学生エンカレッジセミナー」13日開催 本学の理工系学部の卒業生で大学や企業の若手研究者として活躍する4人の女性が、女性の社会参画や女性研究者としての経験などについて講演する	1. 6 (金)	中日 (朝刊)
56 勝又義直・医学系研究科教授らのグループが、検査のため腕などから採取した血液には皮膚の消毒用エタノールが混入している可能性があり、飲酒運転の捜査に使うと誤判定の恐れがあるとの研究結果をまとめる 勝又教授は「社会としての対応を検討し、ガイドラインなどをつくる必要がある」と指摘	1. 6 (金) 1. 7 (土)	中日 (夕刊) サンケイ
57 堀勝・工学研究科教授、西澤典彦・同研究科助教授、伊藤昌文・和歌山大学教授らが共同で、プラズマ光を使い食品に含まれる微量の汚染物質を検出できる小型計測器を開発するベンチャー企業「NUシステム」を10日に設立	1. 7 (土) 1.10 (火) 1.11 (水)	中日 (朝刊) 他3社
58 叙位叙勲：従四位瑞宝中綬章 鍛塚昭三・本学名誉教授	1. 7 (土)	読売
59 書評：『ロマン派音楽の多彩な世界』岩田隆・本学非常勤講師著	1. 8 (日)	読売
60 本学医学部泌尿器科教室に「排泄情報センター」を置き、東海3県をはじめ、横浜、金沢、大阪、高知などから300の法人・個人が参加している愛知排泄ケア研究会が、「介護保険ではなぜ排泄ケアがみそつかずなのか？」と題して研究会を開催	1. 9 (月)	中日 (朝刊)
61 第24回新春春日井マラソン大会が8日に開催され、10キロ競技の一般男子で中村高洋さん・本学学生が初優勝	1. 9 (月)	中日 (朝刊)
62 公開講座「韓国の女性たち～韓国の女性事情」2月12日開催 金慶美さん・本学学生が話す	1. 9 (月)	朝日 (朝刊)
63 ときめき時日記：就活編 尾関雄一朗さん・本学学生ら就職活動に取り組む3年生4人が、この一年、就職の最前線から報告する	1.10 (火)	中日 (朝刊)
64 ハタチの座談会：ガンボルド・テルゲルさん・本学学生ら日本で暮らす20歳の外国人と20歳の「学生之新聞」スタッフが集まってそれぞれの「ハタチ感」を語り合う	1.10 (火)	中日 (朝刊)
65 生命農学研究科動物生産科学第2研究室に在籍する大学院生ら8人が、大学院で学んだ知識を広く、一般に還元するのを目的として、小型哺乳類について教える「出前授業」を実施	1.11 (水)	朝日 (朝刊)
66 万博期間中に「愛・地球博市民放送局」編集デスクを務めた佐藤直樹さん・本学学生は、継承サイトを運営するベンチャー企業「エコアクションニュース」を1月中にも名古屋市内に設立	1.11 (水)	日経 (朝刊)
67 訃報：礮野謙治・本学名誉教授	1.11 (水) 1.12 (木)	中日 (朝刊) 他3社
68 訃報：若林満・本学名誉教授	1.11 (水) 1.12 (木)	中日 (朝刊) 他4社
69 名古屋の将来を語る懇談会座長・松尾稔・本学名誉教授に名古屋の将来を聞く：市のコンパクト化 真の豊かさを実現	1.12 (木)	中日 (朝刊)
70 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 雪に重ねる母への思い	1.12 (木)	朝日 (朝刊)
71 11日、黒田達朗・環境学研究科長の後任に林良嗣・同研究科教授を選出	1.12 (木)	中日 (朝刊) 他2社
72 研究スポット：丹羽利充・医学部附属病院助教授らが458人の健診者を調べた結果、8.7%にあたる40人がメタボリックシンドロームと診断された	1.13 (金)	中日 (朝刊)
73 東海地方12月の地震：林能成・災害対策室助手	1.13 (金)	読売
74 物質・材料の最先端研究と技術移転「NIMS フォーラム2006」2月15日、16日開催 平野眞一総長らによるパネルディスカッション「我が国を支える材料研究・技術」など	1.13 (金)	日刊工業
75 「名古屋大学東京フォーラム2006」24日開催 お茶の水女子大学学長・郷通子・本学名誉教授や伊藤忠商事株式会社取締役会長・丹羽宇一郎・全学同窓会関東支部長らの講演、技術シーズ展示など	1.13 (金)	日刊工業
76 国際機関「ヒトプロテオーム機構」は腎臓と尿の全タンパク質解析計画を採択 新潟大学主導で本学など国内9機関、海外からも30を超える施設が参加	1.13 (金)	中日 (夕刊)
77 法学部公開講座「中国の対日感情」2月9日開催 講師は宇田川幸則・法政国際教育協力研究センター助教授	1.13 (金)	中日 (夕刊)
78 改正耐震改修促進法：校舎の安全、自治体に差 福和伸夫・環境学研究科教授は、補強対策が遅れ気味な自治体については「優先度が高いことを住民に理解してもらう努力が欠かせない」と話す	1.14 (土)	読売
79 13日、次期環境医学研究所長に児玉逸雄・同研究所長を再任	1.14 (土)	中日 (朝刊)
80 「名古屋の将来を語る懇談会」が報告書をまとめ、松原武久・名古屋市長に提出 座長の松尾稔・本学名誉教授は、「100年、200年先に世界に誇れるモデル都市を目指してほしい」と話す	1.14 (土)	朝日 (朝刊)
81 医学部放射線科が2010年を目標に名古屋市近郊に重粒子線治療施設の建設を計画	1.15 (日)	読売
82 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 哀れみの菩薩	1.15 (日)	中日 (朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**1月25日(水)～2月26日(日)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：月・火曜日  
入 場 料：無料

## 第8回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：版画に込められた民衆のねがい～中国伝統年画



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**2月21日(火)**

場 所：環境総合館レクチャーホール  
時 間：17時30分～19時  
入 場 料：無料

## 第17回名古屋大学防災アカデミー

講 師：都司嘉宣 東京大学地震研究所助教授  
演 題：『鸚鵡籠中記』に1707年巨大地震を学ぶ  
—名古屋城畳奉行の地震体験—



[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

**2月28日(火)**

場 所：高等総合研究館カンファレンス  
ホール  
時 間：17時～

## 第12回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：笹井理生 情報科学研究科教授 (高等研究院教員)  
「分子ゆらぎのつくる生命プロセス」  
講演者Ⅱ：森 郁恵 理学研究科教授 (高等研究院教員)  
「行動を支配する神経回路のいとなみを知る」

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛  
052-788-6051

**3月4日(土)**

場 所：文学研究科237講義室  
時 間：13時～16時30分

## 大学院文学研究科公開シンポジウム

テ ー マ：源氏・賢治・ジュリエット

プログラム

- ・シンポジウム (13時5分～)
  - 高橋 亨 文学研究科教授  
「光源氏の罪と栄華」
  - 松澤和宏 文学研究科教授  
「宮沢賢治『銀河鉄道の夜』について—死者とともに生きていく—」
  - 滝川 睦 文学研究科教授  
「チャイルド・マリッジ考—『ロミオとジュリエット』—」
- ・特別講演 (15時30分～16時30分)
  - 中川久定 京都大学名誉教授  
「フランス語が読めていなかったフランス文学者の教授」



[問い合わせ先]

文学部・大学院文学研究科庶務掛  
052-789-2202

**3月22日(水)～9月30日(土)**

場 所：博物館展示室  
時 間：10時～16時  
休 館 日：日・月曜日  
入 場 料：無料

## 第9回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：スポーツと名古屋大学～する・みる・つくる

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

ご退職の教員・事務職員の方々へ

## 名大史をつむぐ資料を大学文書資料室に!

- ◎教育・研究活動、大学・部局運営に関する資料  
(各種書類、会議のメモ、備忘録、スクラップ記事…)
- ◎校費による印刷物・刊行物  
(冊子、パンフレット、ポスター…)
- ◎ご退職関係の記念冊子・記念論集・業績集…  
など

その他、ご処分予定の資料についても、まずはご一報ください



※ご寄贈資料は、名古屋大学大学文書資料室規程及び同利用規程に基づき、大切に保存・管理・活用させていただきます。とりわけ資料の公開につきましては、寄贈者の意向を最優先しつつ、深甚の配慮を致します。

【連絡先】 名古屋大学大学文書資料室  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
TEL 789-2046  
FAX 788-6222  
E-mail [nua\\_office@cc.nagoya-u.ac.jp](mailto:nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp)

名大トピックス No.153 平成18年2月15日発行  
編集・発行/名古屋大学広報委員会  
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)  
TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail [kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp](mailto:kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp)

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

豊田講堂前のソテツは、  
こも巻きされて冬を越し  
ます。  
(平成18年1月17日撮影)



## 46 名古屋大学「職員用バッヂ」

「本学職員と外来者とを容易に識別し併せて之をはいよう（佩用）することによって本学職員たるの気品を保つに役立つため一定のバッヂを制定して之を全学職員に佩用させる」——これは1948（昭和23）年3月に作成された簿冊『職員用バッヂ関係書類綴』に収められている「名古屋大学職員用バッヂ図案募集要綱」の目的規定文です。

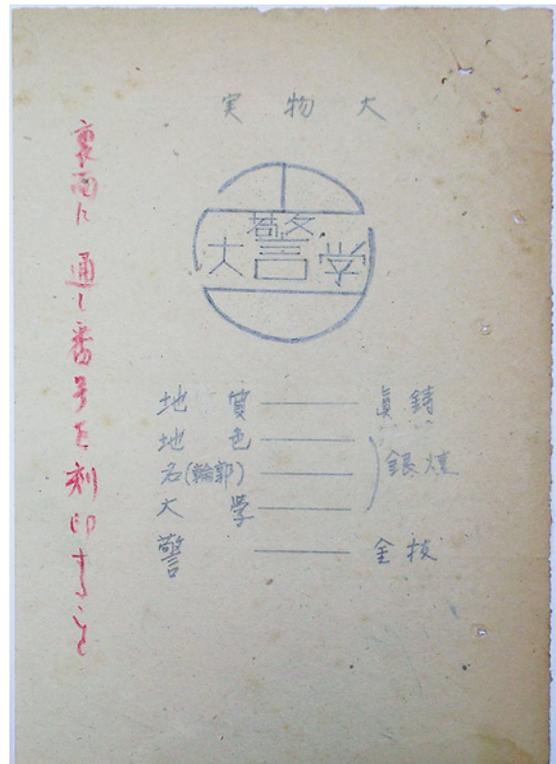
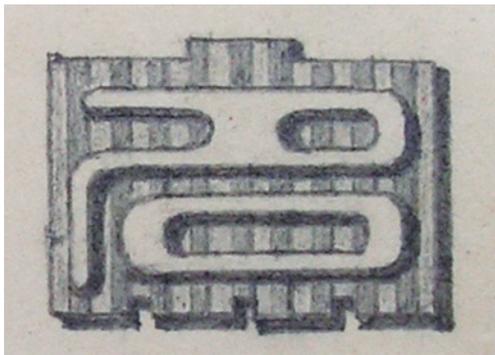
本連載第41回「NU マーク」（No.148）で1953年制定の学生向けの通称シャチバッヂに触れましたが、本学ではそれより5年前に職員用バッヂの制定が行われていました。この職員用バッヂに関しては『名古屋大学五十年史』（部局史一）において、「警備上職員バッヂを制定されたい」との職員組合の要望を受けて、通し番号入りの職員バッヂが作成されたとの記述があります。

冒頭に紹介した募集要綱は、このバッヂ制定にあたって本学在職者からの図案募集を行った際に作成されたものです。同年3月5日に締め切られた図案募集には約140件の応募があり、総長ほか各部局長等15名の審査員による投票が行われましたが、採用図案を決めるに至りませんでした。

そこで、同年4月15日締め切りで再募集を行ったところ約30件の応募があり、審査の結果、医学部教員の応募図案がバッヂのデザインとして採用されました（写真1）。

その後、職員用バッヂは同年内に2000個が製作され、部局別の番号区分にしたがって全職員に貸与されています。残念ながら、大学文書資料室には当時の職員用バッヂが保管されていませんが、おそらく最終的には写真2のようなデザインで製作されたものと思われます。また、職員用バッヂの貸与に際しては1949年2月に「職員用バッヂ取扱要項」が定められて貸与台帳による管理が行われ、職員には通勤途上および公務執行中の着用、大学離職時の返還ならびに破損・紛失時の実費弁償などが義務づけられていました。本資料室に残されている資料によると、1951年からの4年間に少なくとも40個の紛失届が提出されています。

なお、本学では職員用バッヂとは別に、1948年に写真3のようなデザインの警務員用きしやう（警務員用）徽章が制定されています。これは、当時、被服規程に基づく制服の貸与が困難であったため、代替措置として行われたものでした。



1 | 3  
2 |

- 1 第2回募集で採用された図案（オリジナル、鉛筆書き）
- 2 オリジナル図案に修正を施したと思われるカラーデザイン
- 3 警務員用徽章の図案メモ（鉛筆書き）